

日之影町教育委員会発掘調査報告書 第1集

ひら そこ い せき  
平 底 遺 跡

町営「水と緑の夢空間事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003年

日之影町教育委員会

## 序

本書は、町営「水と緑の夢空間事業」における町営住宅および貯水槽の建設に伴う事前調査として、日之影町教育委員会が行った平底遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡周辺は、最近までクヌギ・杉などの人間生活に必要な樹木が生い茂り、立地条件にしても傾斜のある丘陵斜面であったため、昔の遺跡があるとは考えられていませんでしたが、発掘調査の結果、縄文時代終わりから古墳時代中頃までの約800年もの間、人間がこの地に生活をしていたことが判明しました。特に新聞紙上でもご紹介いただきました巨大な堅穴式住居跡は、西臼杵郡内では最大規模のものであり、このような巨大な住居跡が何を意味するのかといったことも含めまして、あらためて日之影町の歴史を振り返ることの必要性を感じる次第であります。

本書が学術関係者をはじめ社会教育および学校教育の場で役立てられ、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、調査に対しましてご理解いただきました地権者の皆様をはじめ、現場調査に關係された皆様方に心から深く御礼申し上げます。

平成15年10月

日之影町教育委員会

教育長 田崎佐市

## 例　　言

- 1 本書は、日之影町における「水と緑の夢空間事業」の町営住宅地建設に伴う事前調査として日之影町教育委員会が実施した平底遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書に使用した遺跡位置図は、国土地理院発行の1/50,000をもとに作成した。
- 3 現地調査における実測図作成および写真撮影は柄原嘉明が行った。なお、空中写真撮影は株式会社九州航空に委託した。
- 4 今回の調査で確認された「側溝形遺構」については、その中からサンプリングした埋土の科学分析を株式会社古環境研究所に委託し、その結果報告を本書に掲載した。
- 5 遺物・図面の整理は日之影町民センターで、柄原嘉明・鳥飼輝美・一水美代子が行った。
- 6 遺物の写真は柄原が撮影した。
- 7 本書に使用した方位は主に磁北である。
- 8 本書の執筆および編集は柄原が行った。
- 9 本書における遺構の略称は竪穴式住居跡をSA、側溝形遺構をSX、土坑をSC、溝状遺をSEとする。
- 10 平底遺跡に関する遺物および実測図は、日之影町民センターが保管している。

# 本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の立地と環境	2
第2章 調査内容	
第1節 調査概要	5
第2節 基本層位	5
第3節 遺構と遺物	7
第3章 化学分析	
第1節 SA 2出土のドングリの年代測定	54
第2節 側溝形遺構(SX 1～SX 8)の埋土分析	56
第4章 まとめ	66
おわりに	71

# 挿図目次

第1図 日之影町内遺跡位置図	3
第2図 遺跡および周辺地形図	4
第3図 基本層位図	5
第4図 平底遺跡遺構配置図	6
第5図 SA 1遺構実測図	8
第6図 SA 2遺構実測図	9
第7図 SA 2炉跡実測図	10
第8図 SA 3遺構実測図	11
第9図 SA 1・SA 2・SA 3遺物実測図	12
第10図 SA 4遺構実測図	13
第11図 SA 4遺物実測図	14

第12図	S A 5 遺構実測図	15
第13図	S A 6 遺構実測図	15
第14図	S A 7 遺構実測図	16
第15図	S A 7 炉跡遺構実測図	16
第16図	S A 8 遺構実測図	17
第17図	S A 5・S A 6・S A 7・S A 8 遺物実測図	18
第18図	S A 9 遺構実測図	19
第19図	S A 9 遺物実測図	20
第20図	S A 10 遺構実測図	21
第21図	S A 11 遺構実測図	22
第22図	S A 12 遺構実測図	22
第23図	S A 10・S A 11・S A 12 遺物実測図	22
第24図	S X 1 遺構実測図	23
第25図	S X 2・S X 3 遺構実測図	24
第26図	S X 4・S X 5 遺構実測図	25
第27図	S X 6・S X 7 遺構実測図	26
第28図	S X 8 遺構実測図	27
第29図	S X 1・S X 2・S X 4・S X 5・S X 8 遺物実測図	28
第30図	S C 1・S C 2・S C 3 遺構実測図	30
第31図	S C 4 遺構実測図	31
第32図	S C 2・S C 4 遺物実測図	31
第33図	S C 5 遺構実測図	33
第34図	S C 5 遺物実測図	34
第36図	S C 6 遺構実測図	36
第37図	S C 6 遺物実測図	37
第38図	S C 7 遺構実測図	38
第39図	S C 7 遺物実測図	39
第40図	S C 8・S C 9・S C 10・S C 11・S C 12・S C 13・S C 14 遺構実測図	40
第41図	S C 12・S C 13 遺物実測図	42
第42図	遺物実測図	42
第43図	縄文土器実測図（1）	45
第44図	縄文土器実測図（2）	46
第45図	石器実測図（1）	48
第46図	石器実測図（2）	49
第47図	石器実測図（3）	50
第48図	石器実測図（4）	51
第49図	石器実測図（5）	52
第50図	石器実測図（6）	53

## 表 目 次

第1表 遺構出土遺物観察表(1) .....	59
第2表 遺構出土遺物観察表(2) .....	60
第3表 遺構出土遺物観察表(3) .....	61
第4表 遺構出土遺物観察表(4) .....	62
第5表 繩文土器観察表(1) .....	63
第6表 繩文土器観察表(2) .....	64
第7表 石器観察表 .....	65

## 図 版 目 次

図版 1 遺跡全景 .....	72
図版 2 SA2 SA2炉跡 SA3 .....	73
図版 3 SA4 SA5 SA9 .....	74
図版 4 SX1 SX2 SX4 .....	75
図版 5 SX5 SX6 SC3 .....	76
図版 6 SC4 SC5 .....	77
図版 7 SC6 .....	78
図版 8 SC7 .....	79
図版 9 SA3土層 SA9土層 .....	80
図版 10 SA10土層 .....	81
図版 11 SA1~3遺物 SA4遺物 SA9遺物 .....	82
図版 12 SA4遺物 SA9遺物 管玉 鉄器類 植物の炭化物 .....	83
図版 13 SC5遺物 SC6遺物 SC7遺物 SC12遺物 SC13遺物 .....	84
図版 14 SC5変形土器 SC6変形土器 SC7変形土器 .....	85
図版 15 SA2須恵器 SA4須恵器 SA9須恵器 .....	86
図版 16 繩文土器 .....	87
図版 17 石器 黒耀石 .....	88

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査にいたる経緯

日之影町では町民の定住化の促進および町民グラウンド造成のために、平成14年度より「水と緑の夢空間事業」として町営住宅および多目的グラウンド等の建設に着手することになった。そのため文化財保護法に従い、削平を余儀なくされる町営住宅および防火水槽の建設地については、平成14年2月に宮崎県文化課に試掘調査をお願いしたところ、数箇所の試掘トレーンチから遺構・遺物が確認され、出土遺物から少なくとも弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡の存在が推定された。そのため、平成14年11月25日より平成15年3月24日まで対象地になる約5,700m<sup>2</sup>の発掘調査を行った。

なお、試掘および本調査にあたっては宮崎県文化課および同埋蔵文化財センターの指導・協力をいただいた。

## 第2節 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

### 調査主体 日之影町教育委員会

教育長 田崎 佐市 (平成14年度～)

教育次長 田中 弘道 (平成15年度～)

押方 良章 (平成14年度)

### 町民センター所長兼社会教育課長

柳田 昇 (平成15年度～)

一水 孝徳 (平成14年度)

社会教育課長補佐 工藤 泰美 (平成14年度～)

同係長 丹波 昌二 (平成14年度～)

### 文化財調査員 (嘱託)

橋原 嘉明 (平成14年度～)

### 調査作業員

田崎 武 佐藤 徳明

黒木 廣

甲斐 好美 田崎 吉児

田崎 秀子

甲斐 菜子 黒田 誠市

西田 正毅

甲斐 安忠 玉田 稔

黒木 勝

工藤 勝喜 一水 祐樹

一水 新五

一水 美代子 一水 照代

佐藤 正明

内倉 宮男 甲斐イツ子

杜若スミ子

鳥飼 煉美 關 學

關 信男

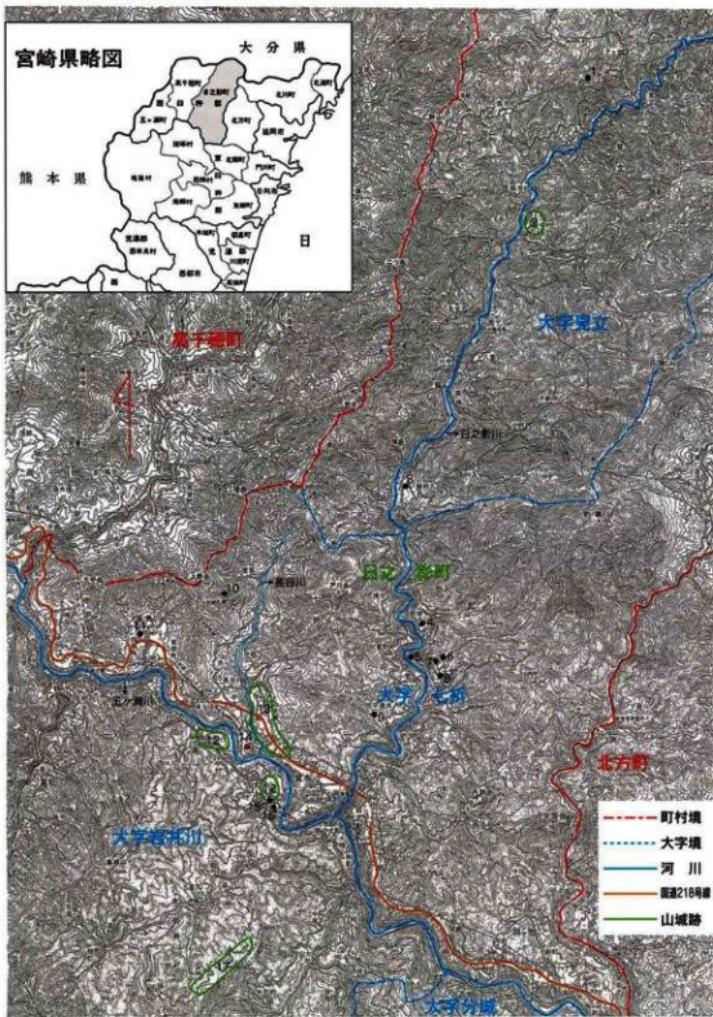
工藤 孝生 (順不同)

### 第3節 遺跡の立地と環境

平底遺跡の所在する日之影町は宮崎県の最北部に位置する（第1図）。北は大分県南海部郡宇目町・大野郡緒方町に接し、諸方に北方町・高千穂町・諸塙村・北郷村に囲まれるように立地している。地形的には九州山地の北部を形成する祖母山を中心とした急峻な山々に囲まれた渓谷の町であり、その谷底には五ヶ瀬川が悠々と流れている。そして、その五ヶ瀬川の上流にあたる日之影川下流域には、戦前より横穴墓・円墳の存在が確認されており、少なくとも6世紀前後には日之影川下流域に集落が存在したことを推測させる。

今回調査した平底遺跡は、五ヶ瀬川とその上流にあたる長谷川下流域に挟まるように位置し、古祖母山系の一つである上野岳から派生する丘陵斜面に存在する。平底遺跡内の標高は241.5mから229.5mで、標高差は最大で約12mあり、決して生活しやすい場所とは考えられないが、日之影町内には広さのある台地がほとんど全くといっていいほどなく、平底遺跡およびその周辺が、当時においては比較的生活しやすい立地条件を備えていたことがわかる。現在の平底地区周辺の集落は北から延びる祖母山系の尾根部に集中している。これは国道218号線の開通もさることながら、この地域が少なくとも戦国時代には一の水城（城ヶ崎城）の領域に含まれており、そのことが主因になっていると考えられる。

これまで日之影町内で調査された遺跡としては、昭和28年（日向遺跡調査団）の大滝遺跡・新畑洞穴遺跡（ともに縄文時代後期）、昭和40・41年（南九州短期大学）および平成12年（同志社大学）に調査された出羽洞穴遺跡（後期旧石器時代～縄文早期）、平成3年度の田向遺跡（縄文時代後晩期）・平成5年度の平谷遺跡（縄文時代早期・弥生時代後期）・平成8年度の布平遺跡（以上、宮崎県文化課）がある。今回の平底遺跡では、以上の遺跡と同時期の遺構・遺物も確認できたが、後述する9号住居跡からは5世紀代の土師器・須恵器が出土しており、当地域における古墳時代以降の歴史もおぼろげながらではあるが、推測可能になってきたと言える。

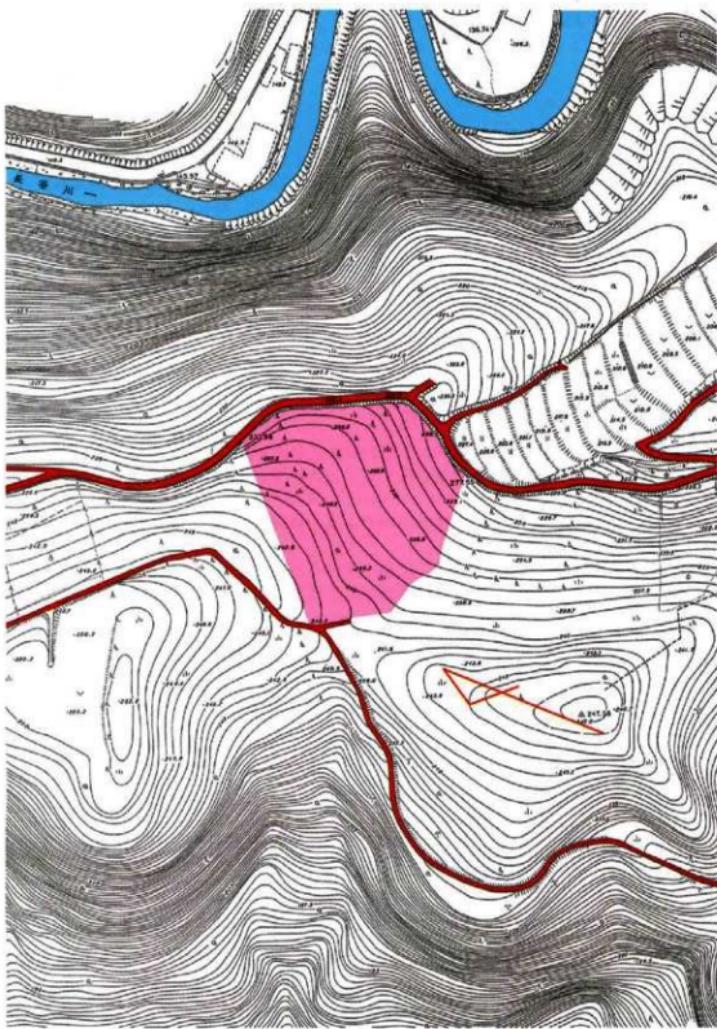


第1図 日之影町内遺跡位図 (S=1/100,000)

- |                      |                     |                       |   |
|----------------------|---------------------|-----------------------|---|
| 1.出羽穴遺跡 (後期田石器・銅文後期) | 7.6に同じ              | 13.一の水城 (城ヶ崎城) 鮫 (中世) | ※山城跡に関しては、今現在「継張<br>図」が作成されているもののみを<br>掲載した。範囲は大枠である。 |
| 2.神草遺跡 (中世)          | 8.島越櫻穴墓群 (古墳時代)     | 14.平底遺跡 (弥生後期～奈良古墳)   |   |
| 3.岩戸村古墳 (円墳・古墳時代)    | 9.高瀬水横穴墓群 (古墳時代)    | 15.田向遺跡 (高文早原・後・飛鳥期)  |   |
| 4.新宿洞穴遺跡 (銅文後期)      | 10.七折鍔乳頭            | 16.平谷遺跡 (高文後・飛鳥・弘生後期) |   |
| 5.大屋遺跡 (鐵文後期)        | 11.布平遺跡 (高文後・飛鳥・中世) | 17.中岡城跡 (中世)          | ※大学七所・岩井川・分城の境は<br>五ヶ瀬川による。                           |
| 6.辻横穴墓群 (古墳時代)       | 12.下坂跡              |                       |   |

河川(峡谷))  
— 溝

第2図 週路および周辺地形図 (1/2,000)



## 第2章 調査内容

### 第1節 調査概要

今回の調査では、南北方向にあわせて8×10mのグリッドを設定し、遺構の実測を行った。遺構配図（第2図）においては、東西方向をアルファベット表記（A～M）、南北方向を数字表記（1～9）にし、本書中における遺構の位置指定はこの組み合わせに拠る。

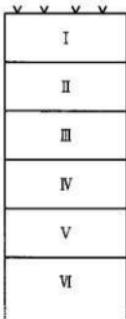
なお調査方法は、最初に重機により表土剥ぎを行った後、作業員を入れて遺構の掘り下げを行った。

### 第2節 基本層位（第3図）

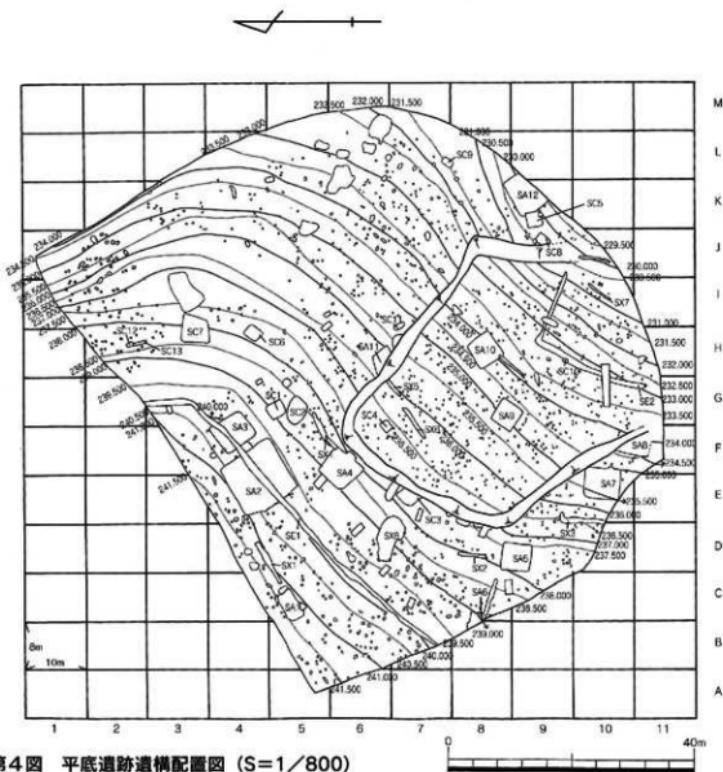
本遺跡の基本層位は、比較的残りのよい遺跡の西端部を基本層位として設定した。

- 第I層 表土で、近代以降に開墾された辛いも畑の耕作土である。  
第II層 黒色土。縄文時代後晩期から古墳時代までの包含層で、時間の経過に伴ってできた腐葉土のたぐいである。  
第III層 アカホヤ火山灰層。本遺跡の遺構検出面である。東側にいくにしたがって後世の削平を受けたためか残りが悪くなる。  
第IV層 薄茶色土でやや粘質気味であるが、V層に比べると礫が多くキメが荒い。高千穂町ではこの層から縄文時代早期の集石遺構が確認されている。  
第V層 灰色粘土層。  
第VI層 薄黄色の姶良火山灰層（姶良AT）である。

なお、本遺跡では堅穴住居跡や土坑などの最下部層には第II層の黒色土が見られず、基本的には第III層のアカホヤ火山灰層から遺構が掘り込まれている。



第3図 基本層位



第4図 平底遺跡遺構配置図 (S=1/800)

### 第3節 遺構と遺物

本遺跡では縄文時代後晩期および弥生時代後期から古墳時代中期までの遺物が出土している。遺構に関しては縄文時代のそれは少なく、弥生時代後期から古墳時代中期までの遺構が中心となる。

なお、縄文時代の土器および石器類に関しては、それぞれが出土した遺構に帰属すると考えられるもの以外は、包含層出土遺物として一括掲載した（第43図～第50図）。

#### 堅穴住居跡（SA1～12）

##### SA1（第5図）

東端のC-5区に位置する。南側と東側は樹木の根により乱されているが、長方形プランを呈し、長軸3.2m、短軸1.6mで主柱穴は長軸方向の端に1本ずつの計2本である。柱穴の間には楕円形の浅い掘り込みがあり、炭化物の存在から炉跡と考えられる。現存深度は、貼り床面で約0.1m、貼り床除去後は約0.4mを測る。出土遺物は縄文時代晩期の突帯文土器の破片2点以外は胴部片のかけらばかりなので、本住居跡の帰属年代は明確には分からぬ。上限が縄文時代晩期と言うにとどめる。

##### 遺物（第9図）

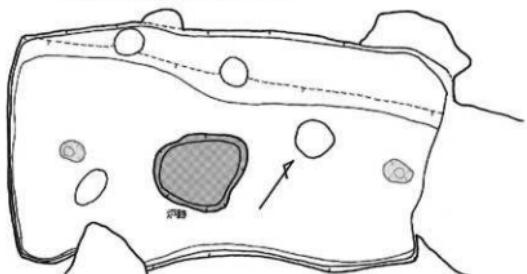
全部で5点の土器片が出土した。その内、口縁部の2点のみ実測図を載せた。

1・2は共に南九州の縄文晩期によく見られる張出突帯文土器の口縁部である。1は突帯がつまみ出しによる造作である。突帯部のやや上から外反するが、さほど顕著ではない。内外ともにもヨコナデであるが、外面の突帯部に関しては突帯上部にはヨコナデの跡は存在しないが、下部にはヨコナデの跡が見受けられる。おそらく、突帯を作成したあとに突帯上部を避けてナデつけたのであろう。2は突帯が貼付されている。損傷がひどく、特に内面は剥離が激しい。突帯の中央部に径6mmほどの楕円形の穴があいている。深さは2mmほどで、貫通はしていない。1と異なり、突帯部の下あたりから滑らかに外反する。外面はナデ調整であるが、内面は剥離が激しいため分からぬ。

##### SA2（第6図）

おもにE-4区からF-4区にかけて存在する。方形プランで、一辺8.2m、現存深度は0.3mから1.0mを測る。本遺跡ではもちろんのこと、これまで西白杵郡内で確認された堅穴住居跡でも最大級のものである。主柱穴は4本で、西側には2本の建て替え、あるいは補強したと考えられる柱穴が存在する。南側にある2本の柱穴の間には炉跡が存在し、ここで煮炊きをしていたものと考えられる。炉跡は直径70cm～90cmの浅い楕円形の土坑を掘った後、その中心からやや西側にずらした位置に直径30cmほどの穴を穿っている。そして浅い土坑の北端に粘土で固めたと思われる赤く焼けた隆起物が2点あり、その間に幅6cmほどの焚口を形作っている。隆起物が赤く焼けていることから、おそらくこの部分から火を入れたことは間違いないと考えられる。ただ、住居跡の中あるいは外に煙出しの煙道は見つかなかった（第7図）。北側の左端には楕円形の土坑を持ち、中から土器の胴部片および自然礫が出土した。

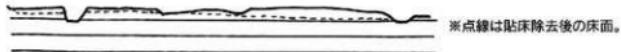
※点線は貼床除去後の上場のライン。



※実践は貼床除去後の下場のライン。

L=241.700

※点線は貼床除去後の床面。

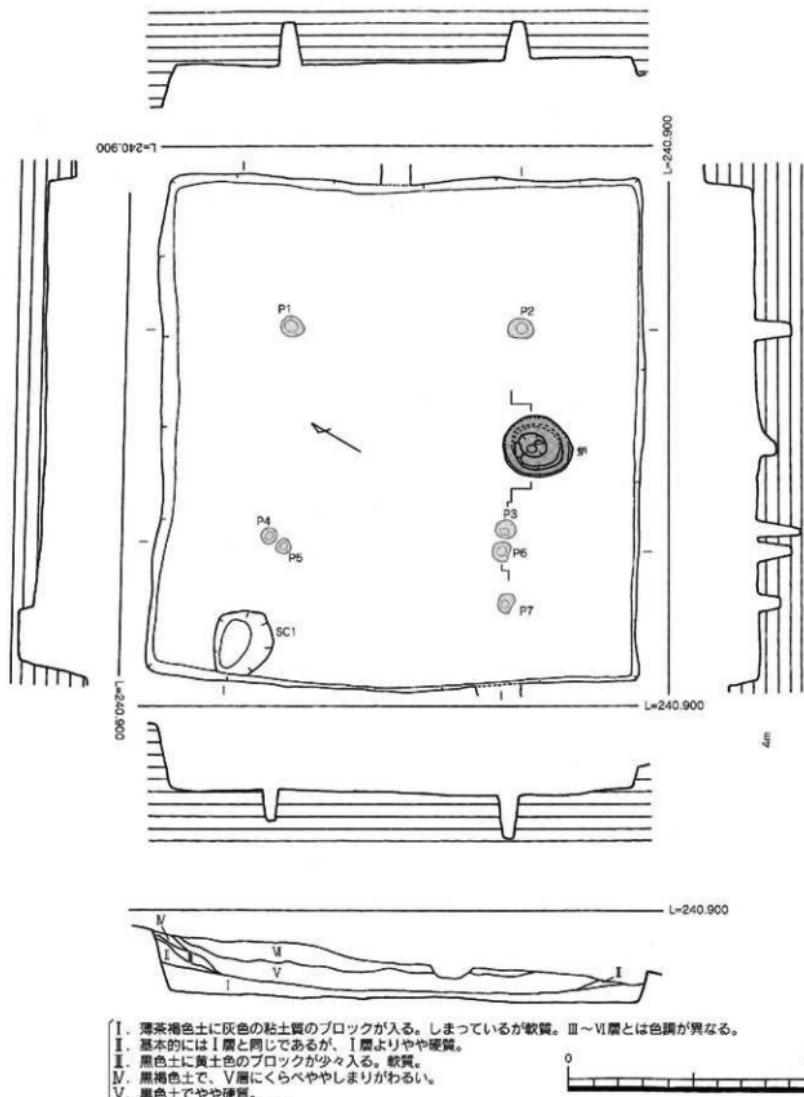


第5図 SA 1 遺構実測図 (S=1/60)

土層状況はレンズ状堆積の様相を呈し、下層は薄茶色の理土で、その上に黒色の腐葉土入り込んでいる。前述したように、本遺跡で確認された遺構の理土は最下部に黒色の腐葉土が堆積しているものではなく、すべて上層部に自然堆積しているものばかりであり、この状況から考える限り、アカホヤ層から掘り込まれた住居の廃絶後に、風化したアカホヤの土砂が入り込み、その後、黒色の腐葉土が遺跡全体を覆い尽くすようになったものと考えられる。

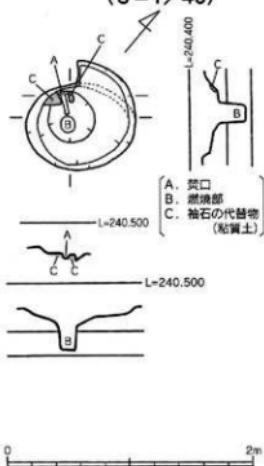
#### 遺物（第9図）

3は小型の鉢形土器。外面はヨコナデの後に斜め方向のハケ目を施し、内面はヘラミガキによる調整が見られる。口縁部は内外ともにヨコナデである。4は変形土器の口縁部であろう。両面ともナデの後にユビオサエをほどこす。そのためか表面が全体的に凸凹している。5は台付鉢の台座の部分である。両面ともナデによる調整である。6は須恵器高壙の端部かと考えられるが、小破片のため断定はできない。外面には釉がかかっている。



第6図 SA 2 遺構実測図 ( $S=1/80$ )

第7図 SA2炉跡実測図  
(S=1/40)



SA3 (第8図)

F-4区からG-4区にかけて位置し、2号住居跡のすぐそばに隣接する。方形プランとして造成したと考えられるが、実際は少し歪んでいる。北辺・南辺は約5.6m、西辺は5.1m、東辺は6.3mを測り、現存深度は0.3m~0.8mを測る。主柱穴は4本で、床面で確認されたP1・P2・P3・P4が妥当すると考えられる。P4とP2の間には炉跡があり、SA2と似た構造になっている。P4に関しては、貼床面では検出できず、床面でその存在が確認できた。貼床は深い部分で8cmほどあり、その後からP5・P6・P7・P8・P9・P10が確認できた。ただこれらはある程度の深さはあるものの、掘り方が小さい上に位置もばらばらであるので、柱穴としての可能性は低いと考えられる。

土層は3層で、I層・II層が自然堆積した後にIII層にあたる灰色の硬くしまった土が堆積している。このIII層は炭化物を多く含み、住居廃絶後に二次利用されたものと考えられる。

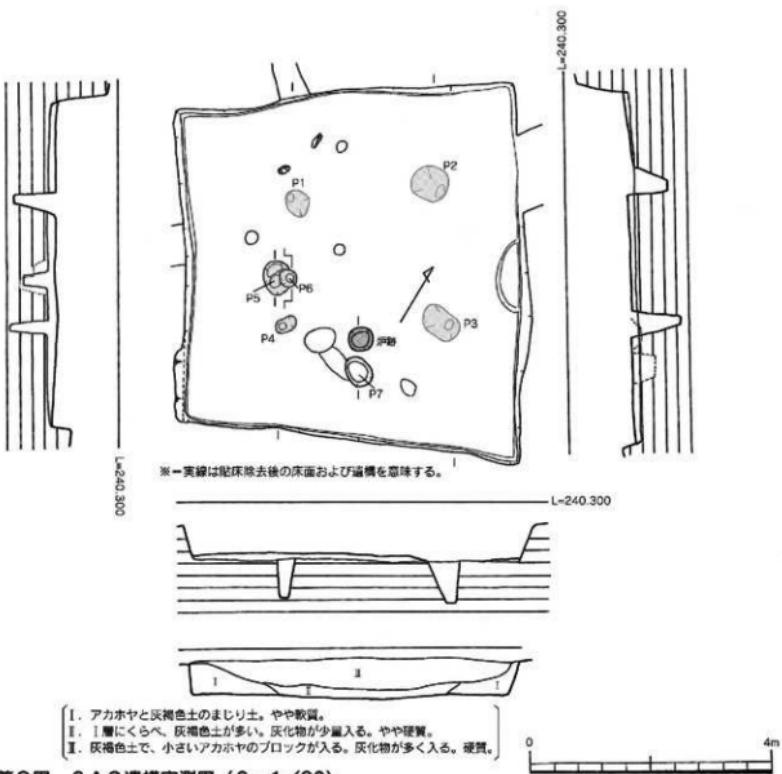
遺物 (第9図)

縄文時代晩期から弥生時代までの遺物が出土している。ここでは7のみを掲載した。  
7は壺形土器の底部である。底部は平底の形状を呈し、径は3.1cmを測る。内面はユビオサエ、外表面は縦・斜め方向のハケ目による調整である。

SA4 (第10図)

E-6区からF-6区にかけて位置する。方形プランを呈し、南北方向6m・東西方向5.8mで南北方向がやや長い。現存深度は20cmから50cmを測る。南側に入り口を持ち、地天を床面より一段高くする形で作られている。主柱穴は4本で、南側の柱穴の間に炉跡がある。また、北側の隅に径80cmほどの土坑を持ち、中からは自然礫が1点出土した。

土層は東西方向と南北方向の2方向に土層ベルトを設定した。基本的に自然堆積であるが、東西方向ベルトの土層観察の結果、住居跡の北側の壁から約2.6mの幅で人的に塗り固められたベッド状遺構の存在が確認された。高さは一様ではなく、北側から南側にいくにしたがってなだらかに下っており、北側50cm、南側40cmを測る。北側の2柱穴はVI層の下から検出したので、ベッド状遺構を作成する前に掘り込まれたものであろう。そしてこのベッド状遺構の上に新たな柱穴が掘り込まれていた可能性が高い。なお、この住居跡も3号住居跡同様にII層からIV層にかけて炭化物および焼土の存在が認められる。住居廃絶後に二次利用したものであろう。

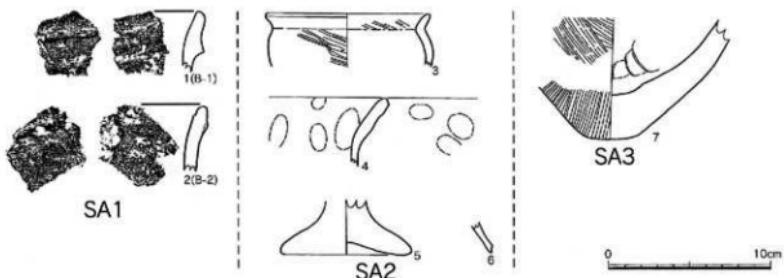


第8図 S A 3遺構実測図 ( $S=1/80$ )

#### 遺物（第11図）

縄文時代晩期から古墳時代までの遺物が出土している。8~18は壺形土器の口縁部である。8~10は口縁部のすぐ下から外反し、そして口唇部付近でわずかに内湾する。11~17は口縁部がほぼ直線状に伸びるタイプのもので、つくりは厚手である。18は8~17までのものは異なるタイプのものである。頸部から口縁部にかけて滑らかに外反し、口唇部のつくりも丸い形になっている。

19~25は小型の土器片である。これだけの部分で器種を断定するのは難しいが、19~24は壺身の口縁部、25のみが別器種（高壺の口縁部か）と考えられる。19~21は体部から口縁部にかけてわずかに内湾するタイプのもので、調整は3点とも内面はヘラミガキ、外面は丁寧なヨコナデによる。22~24は口縁部が外反するタイプであるが、22のみはほぼ直線状にのびる。内外



第9図 SA1・SA2・SA3 遺物実測図 (S=1/3)

面ともヨコナデがほどこされる。23は、外面はヨコナデであるが、内面は剥離が激しく、調整は分からぬ。24は内外面とともにヘラケズリによる調整であるが、外面にくらべ内面が丁寧に磨かれている。25は高坏の口縁部であろうか。内外面ともに丁寧なヘラケズリがほどこされているが、外面は剥離が進行している。

26・27は高坏の脚部。26は足首の部分が外にふくらむ。内外面ともナデ調整による。27は足首の部分がほぼ直線状にのびるタイプのものである。外面は丁寧なナデ、内面はヘラケズリ後にナデをほどこす。

28は須恵器の高坏の端部か。端部のすぐ上部に、つまみ出しによる突帯をもち、現状の限りでは外部前面に釉がつくが、自然釉か施釉によるものかは分からぬ。形態的にはSA2出土の16とほとんど同じである。

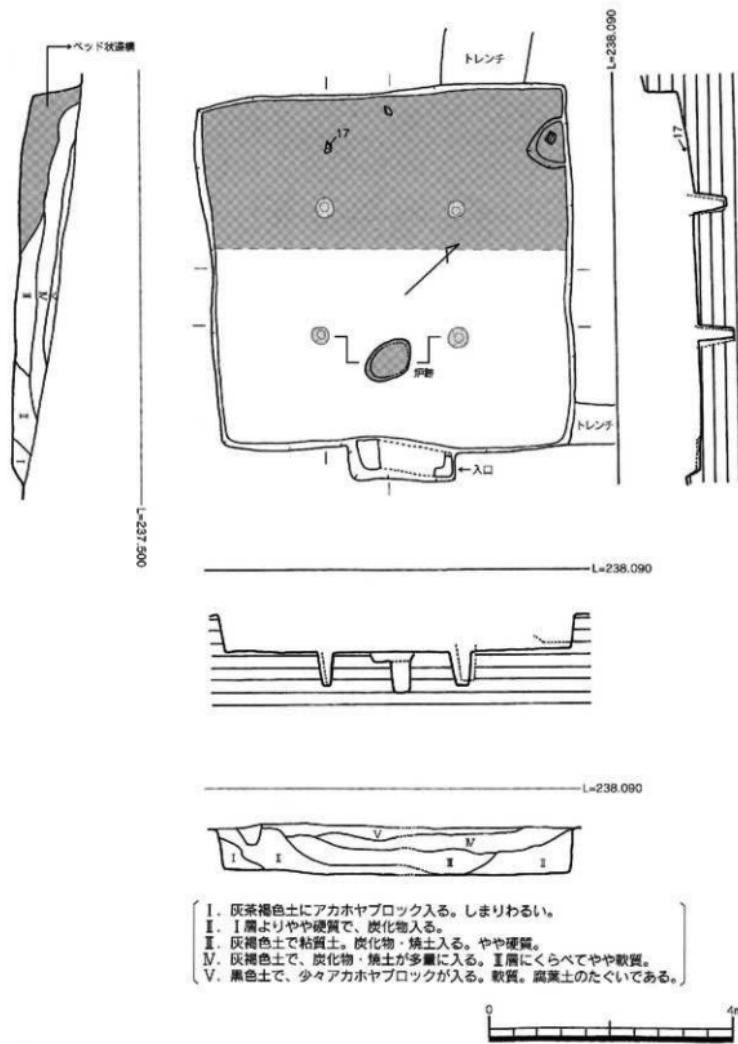
#### SA5 (第12図)

D-8区からD-9区にかけて位置する。方形プランで、南北方向4.6m、東西方向4.3mで現存深度は約30cmを測る。主柱穴は南北軸上の2本で、遺構中央部からやや北東にずれた位置に炉跡が存在するが、ほかの竪穴住居跡と異なり、床面を掘り込んだものではなく、直に火を焚いた言わば焚き火跡のような様相を呈している。また西側と北側の壁際に土坑を持ち、それぞれ現存深度はともに約60cmを測る。

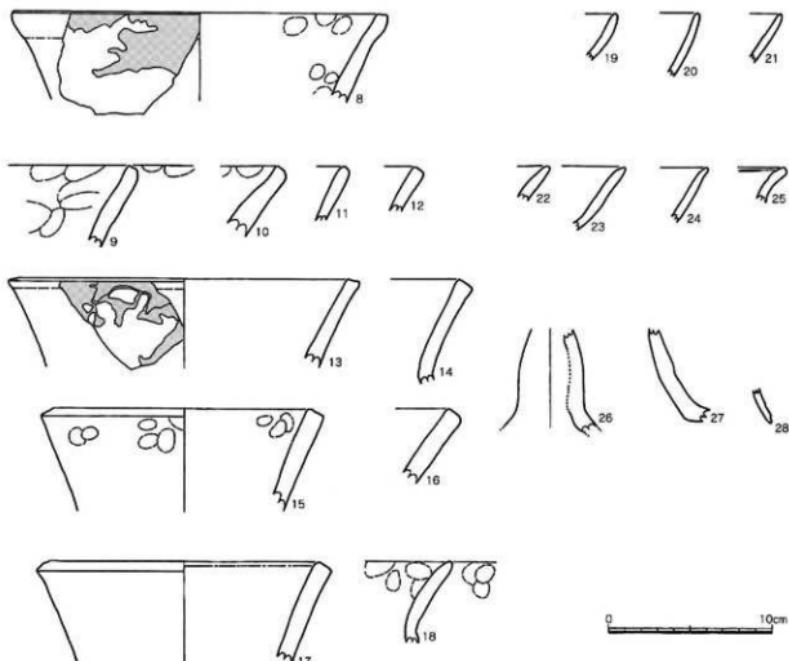
#### 遺物 (第17図)

縄文晩期の土器のみ出土した。

1は深鉢の口縁部。口縁部につまみ出しの突帯をもつ。口縁部は直線状にのびる。2は浅鉢の口縁部である。内面口唇部に幅2mmほどの沈線をもつ。外面は頸部が横に張り出し、それが口縁部に内湾する形で滑らかな三角形を形づくる。3は深鉢の底部。かなり厚い作りで、中央部で約2.0cmを測る。内外面ともにナデ調整と考えられるが、剥離が激しい。



第10図 S A 4造構実測図 (S=1/60)



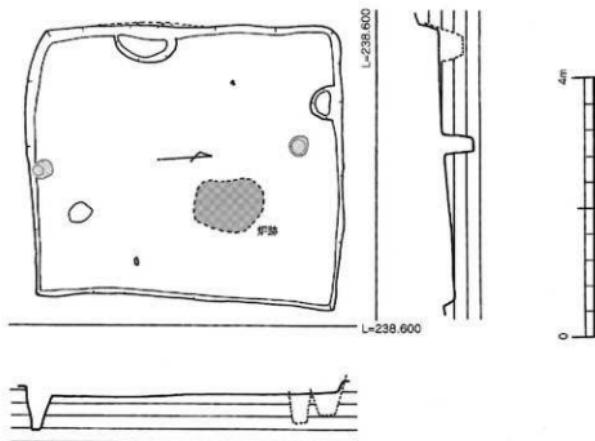
第11図 SA4遺物実測図 ( $S=1/3$ )

#### SA6 (第13図)

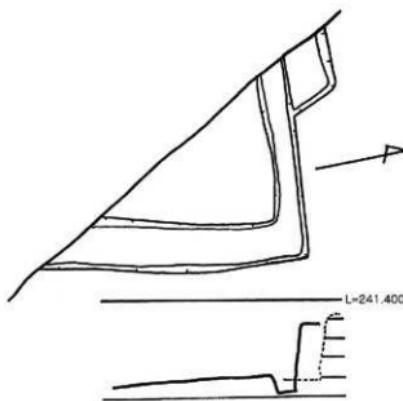
SA5の北西側に存在する。プランの約半分は調査区外にあるが、方形プランと考えられる。北側に一段高い張り出し部を持ち、東側の一部をかく乱に乱されていた。造構内部の壁際に約40cm幅の側溝をもち、中央部を高くしている。現存深度は中央の床面で約40cm、側溝部分で約60cmを測る。主柱穴は調査できた範囲では検出されなかった。

#### 遺物 (第17図)

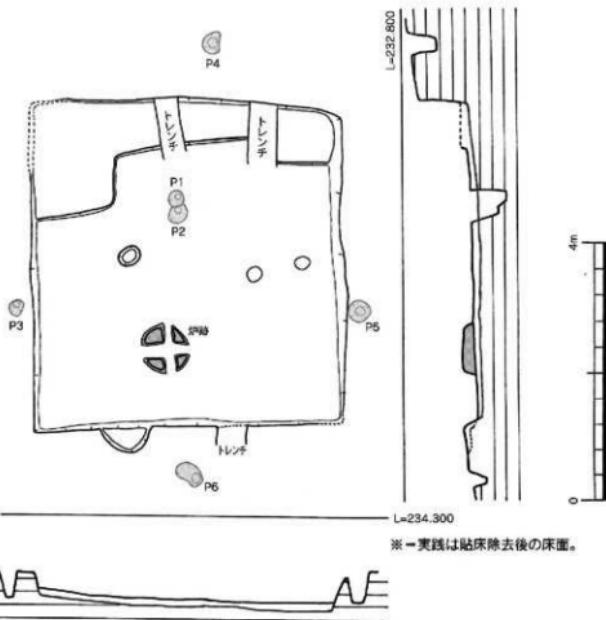
縄文時代晩期の深鉢の口縁部が1点出土した。口縁部につまみ出しの突帯をもち、調整は内外面ともに横方向の(ヘラ)ケズリをほどこす。



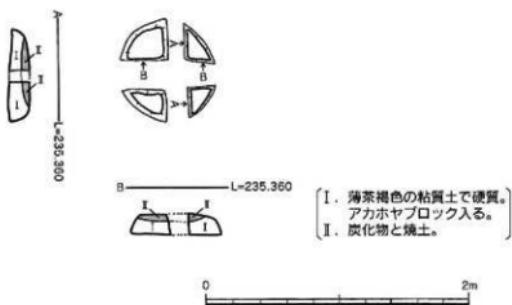
第12図 SA 5遺構実測図 ( $S = 1/60$ )



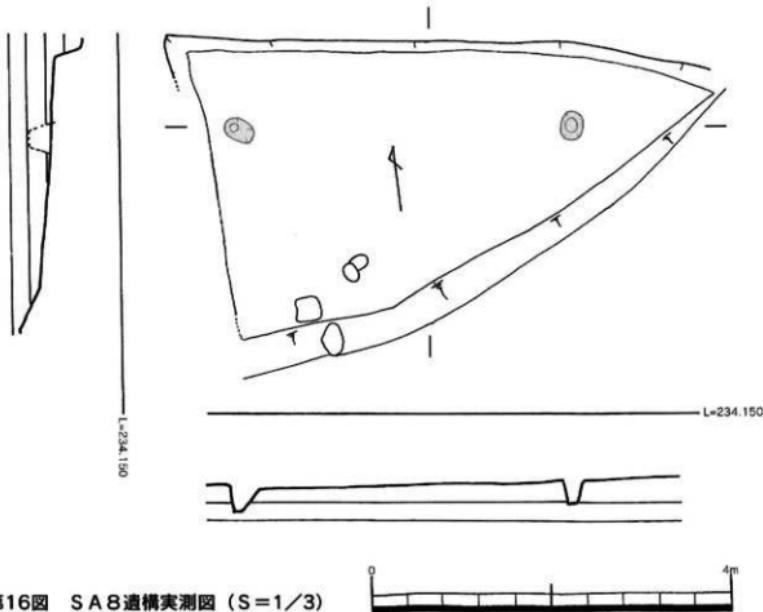
第13図 SA 6遺構実測図 ( $S = 1/40$ )



第14図 SA 7 遺構実測図 (S=1/60)



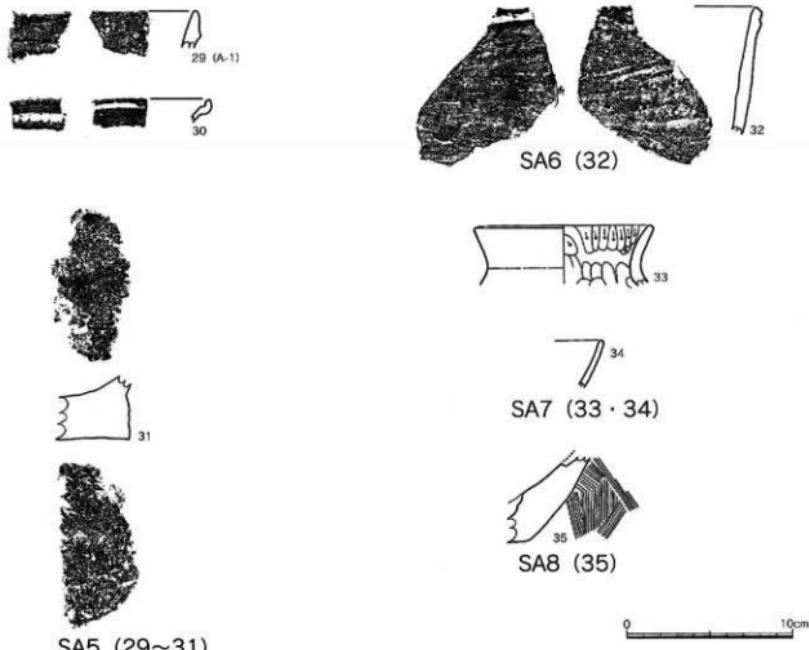
第15図 SA 7 炉跡 (カマド跡?) 遺構実測図 (S=1/30)



第16図 SAB8遺構実測図 ( $S=1/3$ )

#### SA7 (第14図)

E-10区に位置する。方形プランを呈し、長軸（東西方向）5.2m、短軸4.8m（南北方向）で現存深度は床面で約20cm～60cm、貼り床除去後で約30cm～70cmを測る。主柱穴は中央部から1mほど西側に離れて位置するP1・P2および外側のP3・P4・P5・P6と考えられる。P1・P2は検出段階で、P2の後にP1が新たに掘り込まれているのが確認できた。現存深度はP2が40cm、P1が55cmでP1の方が深く、安定性のためにP1を深く掘りなおしたものと考えられる。外側の柱穴はP3・P4が約40cm、P5が50cm、P6は20cmでP6が他の三つに比べると浅いが、位置的には比較的バランスよく配置されている。床面は全体的に貼床をしており、西側を一段高くしてベッド状遺構のようにしてある。また、東側には土を盛り上げて造作したと考えられるカマドに類似した遺構が確認された。高さは20cmほどあり、上部中央部には焼土が径約50cmほどの幅でレンズ状に堆積していた。焼土の深さは約8cmほどで、この部分で煮焼きしていたものと考えられる。構造的にはカマド遺構によく見られる焚口や煙道ではなく、壺などを置くのに使用する袖石などの痕跡も見られなかった。



第17図 SA5・SA6・SA7・SA8遺物実測図 (S=1/3)

#### 遺物（第17図）

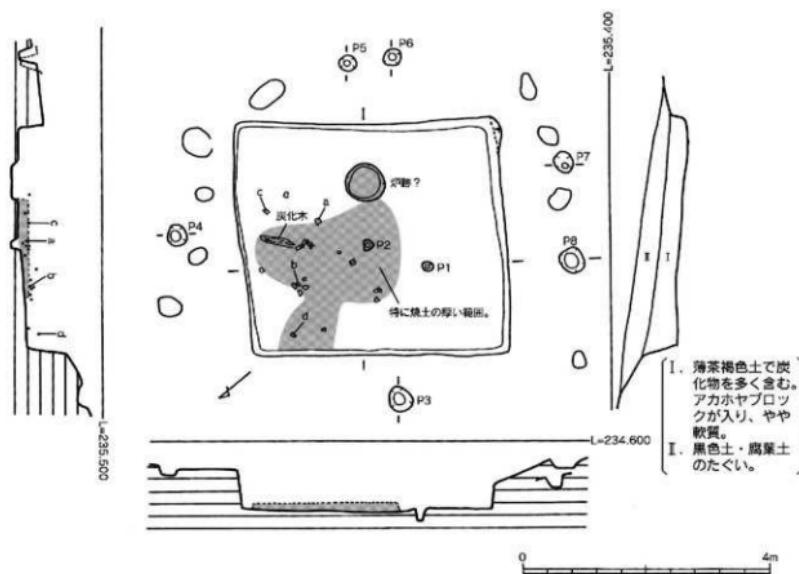
33は土師器で、壺形土器の口縁部であろう。頸部から口縁部にかけて滑らかに外反する。口縁部は短い。調整は、内面はやや雑なヘラミガキ、外面は縦方向のナデによる。34は壊身の口縁部か。口縁部にかけてわずかに内湾する。内外面とも丁寧なミガキをほどこす。

#### SA8（第16図）

F-10区から同11区にかけて位置する。東側および北側は近代以降の畑地造成時の削平により、南側は杉の木の根を除去する際にそれぞれ消失してしまった。残存する西側部分で約6m、現存深度は30cmを測る。主柱穴は西側に2つ存在することから（P1およびP2）、最低でも4本は存在していたものと考えられる。床面からは焦土および炭化物がまったく確認されなかった。おそらく、炉跡は消失した東側に存在していた可能性がある。

#### 遺物（第17図）

1は弥生土器の底部である。内面はナデおよびユビオサエ、外面はハケ目調整による

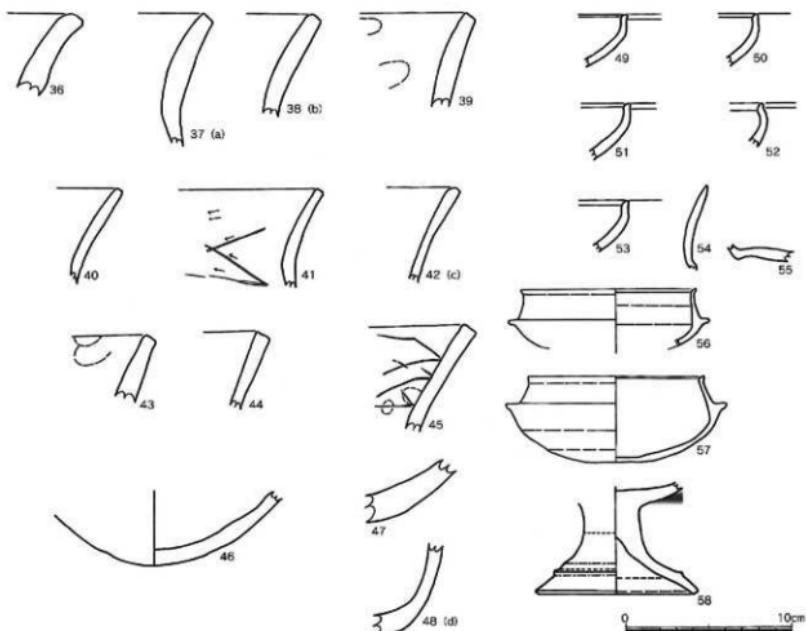


第18図 SA9遺構実測図 ( $S=1/80$ )

#### SA9 (第18図)

SA10の西4mに位置する。長軸4.3m、短軸3.8mであるが、方形プランとして掘り込まれたものであろう。内部中央部から北側にかけて焼土および炭化した木片が認められた。火災にあったものであろう。主柱穴は、P1・P2以外では遺構内部にはこれといったものではなく、外部のP3～P8までのいずれかを使用していたものと考えられる。位置的にはP3・P4・P5・P8が妥当であるが、P5以外は浅いため竪穴住居を建てるには不適当かもしれない。ただ、住居跡内部にない以上、内部のP2と外部の柱で建てていたと考えられる。

施設としては、南東側に炉跡が存在し、この部分に焼土がかなり強く残っていた。前述の火災はこの炉跡からの出火が原因であるのかもしれない。



第19図 SA9遺物実測図 ( $S=1/3$ )

#### 遺物（第19図）

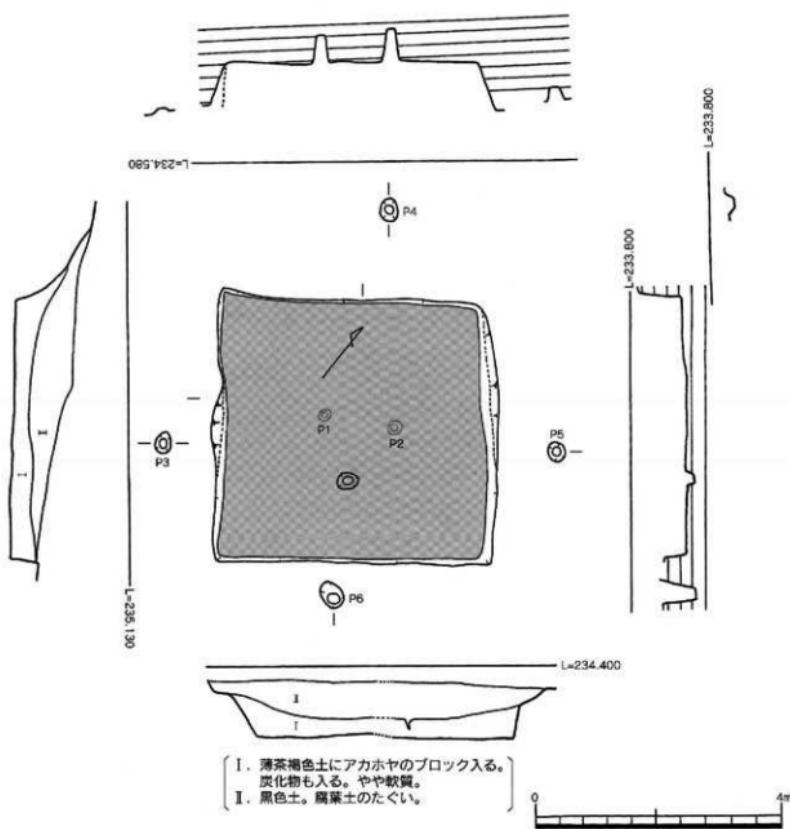
36～45は土師器彫形土器の口縁部である。36～39は口縁部が外反するタイプで、特に36は顯著である。40～41も外反するが、つくりが薄いタイプのものである。41のみが内面に横方向のヘラケズリをほどこす。43～45は比較的厚いつくりで、口縁部がほぼ直線状にのびるタイプのものである。このタイプは前述したSA4から出土した11～17（第11図）に類似している。

46～48は土師器底部であるが、46が丸底、47・48が平底である以外は分からぬ。

49～53は壺身の口縁部であろう。すべて口縁部の下で内湾し、その後、口縁部にかけて顯著に外反する。5点ともかなり磨耗が激しいが、基本的に内面はナデ、外面は横方向のヘラケズリをほどこす。

54は土師器の壺あるいはハソウの口縁部か。55は土師器壺形土器の頸部付近の破片である。内面をヨコナデ、外面は粗いヘラケズリをほどこす。

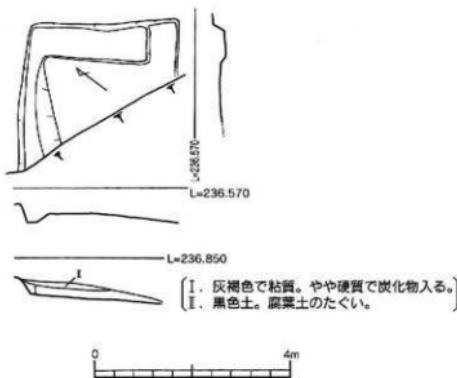
56～58は須恵器である。56が口縁部が直線状にのび、返りは先端が尖った様相を呈するのに対し、57は口縁部が外反し、返りも先端が丸みを帯びている。58は高壺で、愛媛県松山市周辺で焼かれた搬入品である可能性が高い。端部の少し上に突帯をもち、ラッパ状に広がる。また、壺部底部に横方向のカキ目がほどこされている。断面は四角形で、端部の内面で接地するようにつくられている。



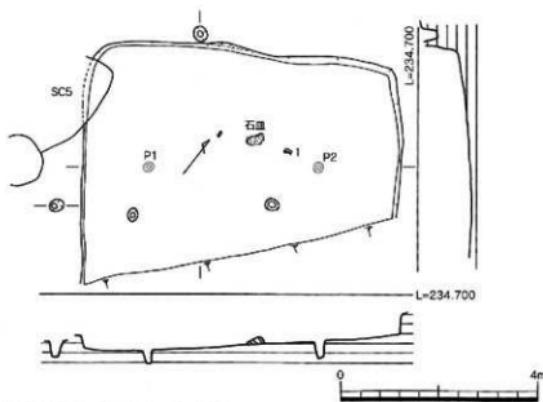
第20図 SA10造構実測図 ( $S=1/80$ )

SA10 (第20図)

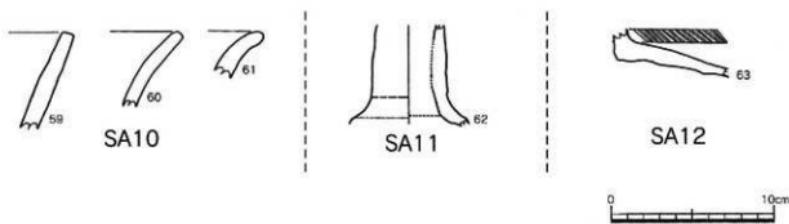
H-8区に位置する。約4.4m四方で、全体的に焼土が広がっていた。火災に遭ったものであろう。主柱穴は内部のP1・P2を中心に、外側のP3・P4・P5・P6を使用していたものと推定される。



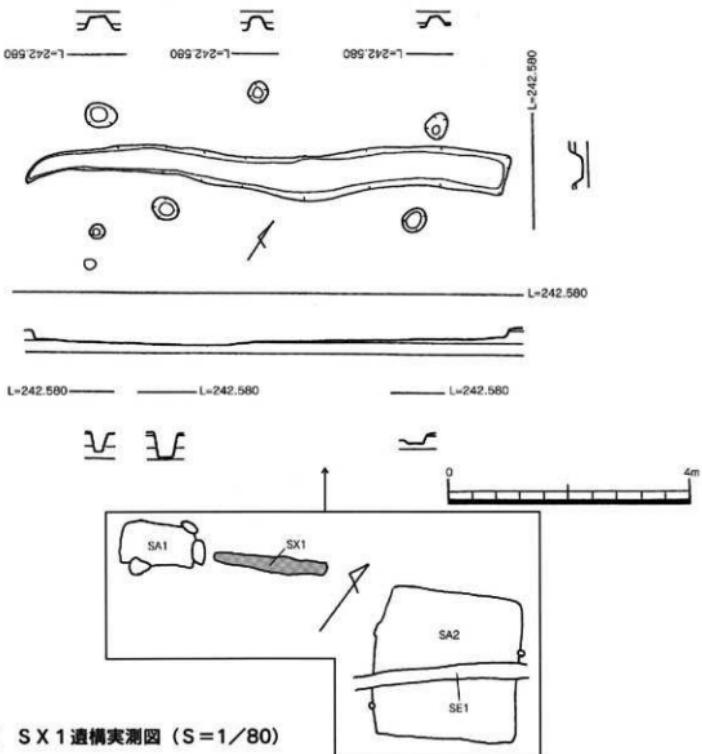
第21図 SA 11遺構実測図 ( $S = 1/80$ )



第22図 SA 12遺構実測図 ( $S = 1/80$ )



第23図 SA 10・SA 11・SA 12遺物実測図 ( $S = 1/3$ )



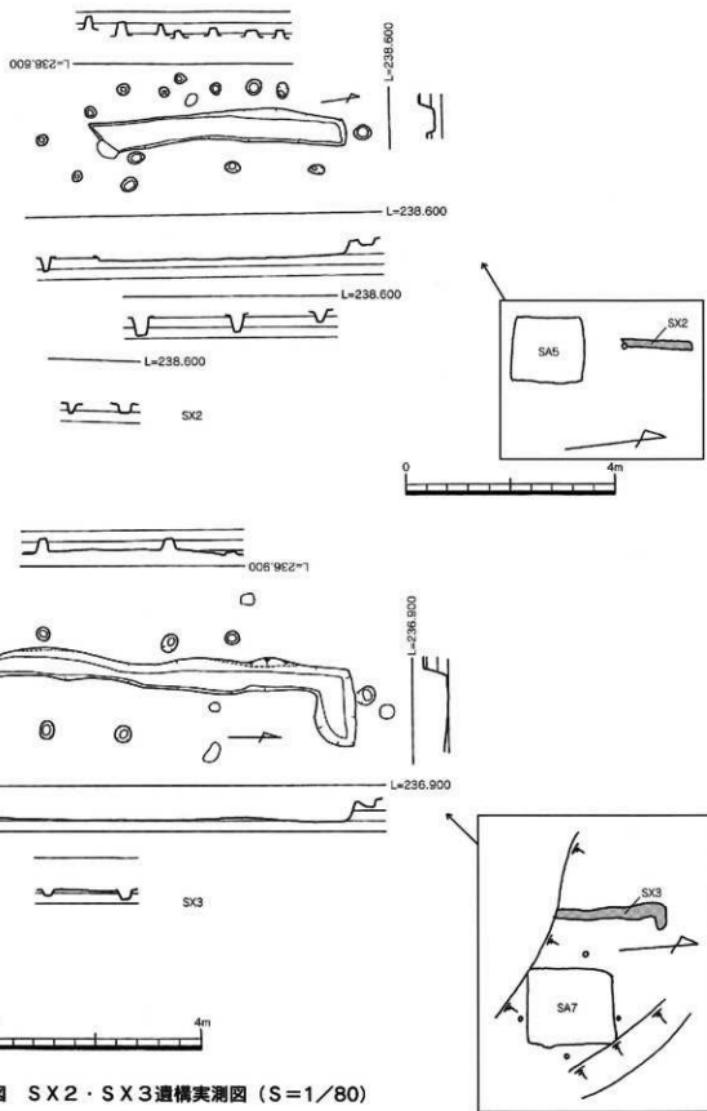
第24図 SX1 遺構実測図 ( $S=1/80$ )

#### 遺物（第23図）

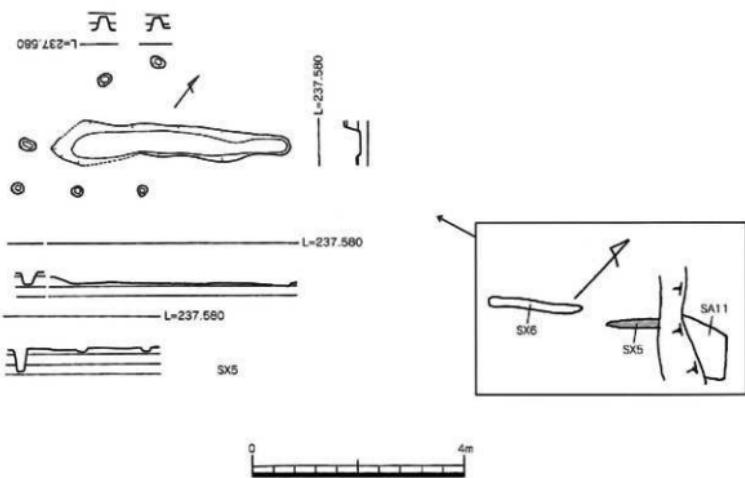
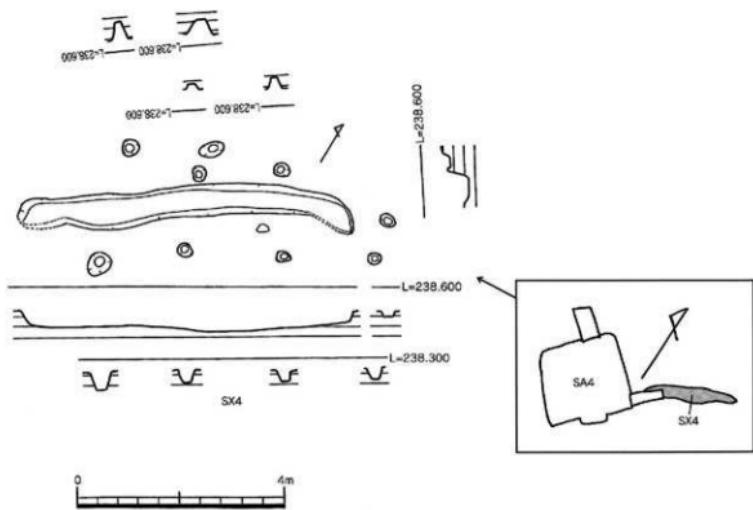
59～61は壺形土器の口縁部である。口縁部は、59は直線状、60は緩やかに外反、61は屈曲と、それぞれ形態が異なる。59・60はSA4・SA9出土の壺形土器に類似するが、61はどちらかと言うと弥生時代終末～古墳時代初頭の土器の感を受ける。

#### SA11（第21図）

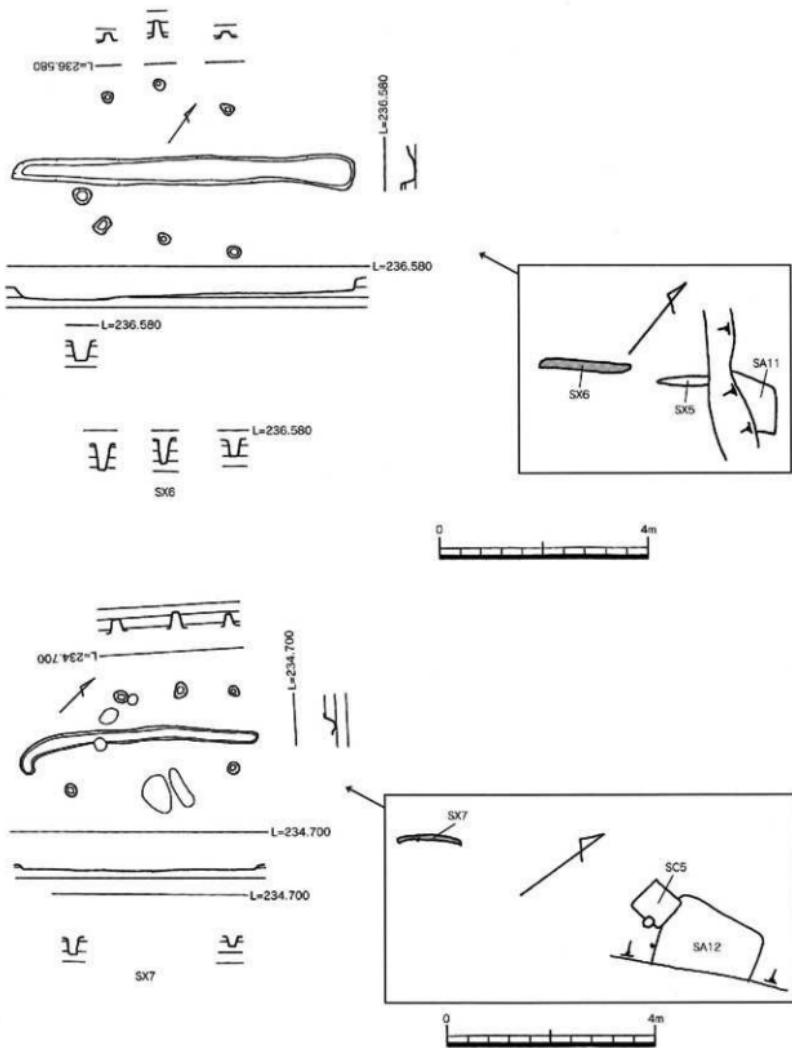
H-6区に位置する。西側半分は畠地造成時に削平され、消失している。現存状態から推測して約3.1mの方形プランであろう。内部壁面に側溝を持つが、東側は4分の3ほどのところで終わり、逆L字状の様相を呈している。現存深度は側溝部分で約40cm、床面で約20cmほどである。現存部分も後世の削平を受けたためか、特に南側の残りが悪い。主柱穴は調査できた範囲では確認できなかった。



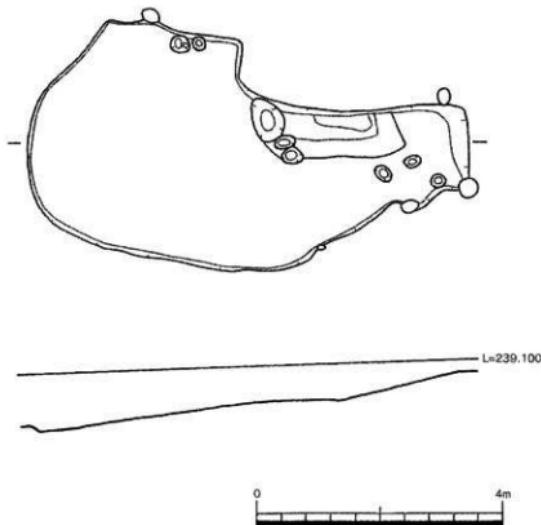
第25図 SX2・SX3遺構実測図 ( $S=1/80$ )



第26図 SX4・SX5遺構実測図



第27図 SX6・SX7遺構実測図 (S=1/80)



第28図 SX8遺構実測図 ( $S=1/80$ )

#### 遺物（第23図）

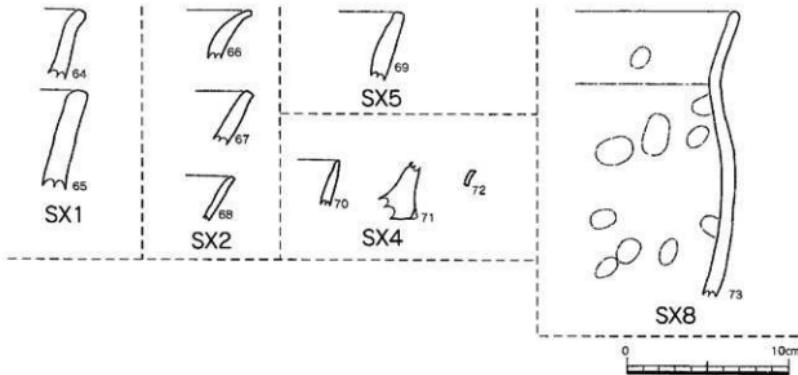
図示可能な遺物は1点のみであった。62は高壙の脚部である。下方の端部はないが、緩やかにラッパ状に開くたぐいのものであろう。2~3mmの比較的大型の蝶を多数含んでいる。その反面、角閃石・石英などのガラス系の鉱石は含まない。

#### SA12（第22図）

K-9区に位置する。東側半分を道路造成時に削平されたために消失している。約6.6mの方形プランで、主柱穴は内部のP1・P2であり、外部のP3・P4を使用していた可能性もある。なお、東側の外にはピットは存在しなかった。P1とP2の間に焼土が認められ、ここが炉跡であろう。西端部をSK1に切られている。

#### 遺物（第23図）

7は頸部に貼付刻目突帯をもつ壺形土器と考えられる。内面はナデの後にかなり強いユビオサエをほどこす。外面はナデ調整である。全体的に調整はかなり粗い。胎土にかなり多くの石英および赤色粒子を含む。



第29図 SX1・SX2・SX4・SX5・SX8 遺物実測図 (S=1/3)

#### 側溝形遺構 (SX1~8)

##### SX1 (第24図)

SA1の東2mの場所に位置し、全長約8.0mで、現存深度は約20cmを測る。周囲に深さ20cm～40cmのピットが存在するが、この遺構に伴うものは断定できない。検出時は灰色の硬い埋土が傾斜の下側（南東側）にはみでるような様相を呈していた。少しずつ灰色の埋土を削り取るようく掘り下げたところ、図のようなプランになった。本遺跡ではこのような遺構が全部で7箇所確認されている。そしてどれも埋土がなかば地天に同化しているために、もともと低い傾斜下側のプランを明確に検出することができなかった。堅穴住居跡や土坑に比べてプランがはっきりしないのはのは、そのためである。また、これらほとんどすべてが堅穴住居跡に隣接するように存在することから、堅穴住居に付随する遺構である可能性が高いと考えられる。

##### 遺物 (第29図)

64は鉢形土器の口縁部であろうか。胴部から頸部にかけてゆっくりふくらむような感じで外反し、頸部で一度締まる。そして頸部から口縁にかけて滑らかに外反する。内部は口縁部をヨコナデ、胴部はユビオサエののち、ナデをほどこしている。外部はヨコナデののちに部分的にナデ消した跡が見受けられる。65は壺形土器の口縁部である。内外ともナデ調整であり、外部は上部の3分の2ほどにススが付着している。

##### SX2 (第25図)

SA5から北に約2m離れた同軸上に位置する。全長約4.8mで現存深度は10cm～30cmを測る。周囲には径約20～30cm、深さ20～40cmの小型の柱穴が存在する。この遺構は比較的残存状態が良好であった。遺物については図示可能なものは出土しなかった。

##### 遺物 (第29図)

66・67は壺形土器の口縁部、68は壺身の口縁部であろうか。

#### SX3（第25図）

SA7の西側約3mに位置する。南側の一部は調査区外にあり、現時点での全長は約7mほどで、現存深度は残りのよい西側で約50cm、東側はほとんど残っていない。ここも同様に、周囲に小型の柱穴が数箇存在する。なお、図示できる遺物は出土しなかった。

#### SX4（第26図）

SA4から北東側約60cmのところに位置する。南北側は試掘調査の際に消失している。現状での全長は約6.4m、現存深度は最深部で約40cm、残りの悪い南東側で約15cmほどである。これも周囲に小型の柱穴が数箇存在する。

#### 遺物（第29図）

70・71は、器種は分からぬが、それぞれ口縁部・底部である。72は小片であるが、須恵器の壊身の口縁部である。SA9から出土している須恵器壊身（第19図）と同時期のものである。

#### SX5（第26図）

SA11のすぐ南西側に位置し、北東部側はSA11同様に削平を受けているため、残りが悪い。全長約4.6mで、現存深度は北西側で約30cm、南東側で約8cmほどである。周囲には小型の柱穴が数箇存在する。

#### 遺物（第29図）

69は壺形土器の口縁部であろう。つくりはかなり厚く、最大部で1.0cm以上ある。

#### SX6（第27図）

SX5の南西側約1.2mのところに位置する。当初はSX5と同一遺構として掘り下げを行っていたが、掘り下げの途中で別遺構であることが判明した。全長約6.6m、現存深度は最深部で約30cm、浅いところで12cmほどである。周囲に数個の柱穴が存在する。

出土遺物に関しては、図示可能なものはなかった。

#### SX7（第27図）

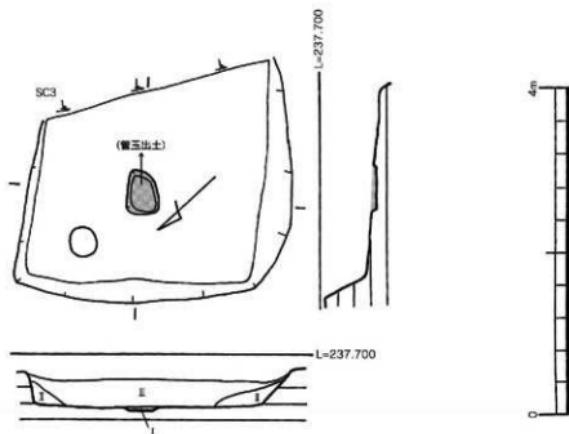
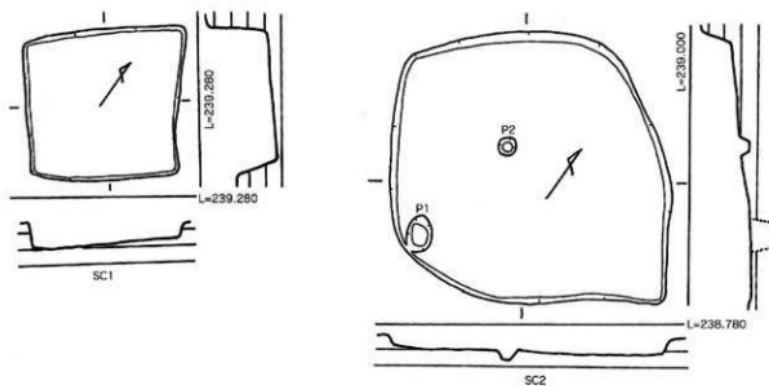
J-8区に位置する。これのみ最も近い竪穴住居跡（SA12）から離れたところに位置している。全長約4.6mで、現存深度は最深部で約18cmを測る。これも周囲に径15cmほどの柱穴が数箇存在している。ここも図示可能な遺物は出土しなかった。

#### SX8（第28図）

D-6区を中心に四つのグリッドにまたがって存在する。灰色の硬質土が全面に入っている、全体のプランは特に整った形ではなかった。

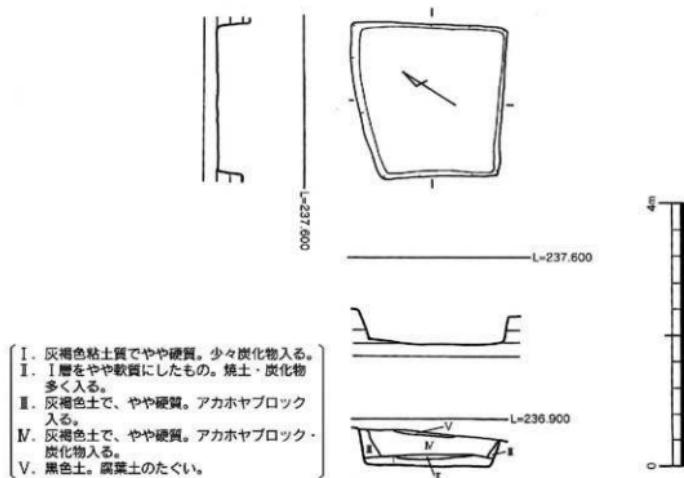
#### 遺物（第29図）

73は弥生時代後期の壺形土器である。内面は主にナデおよびユビオサエ、外面はナデによる。

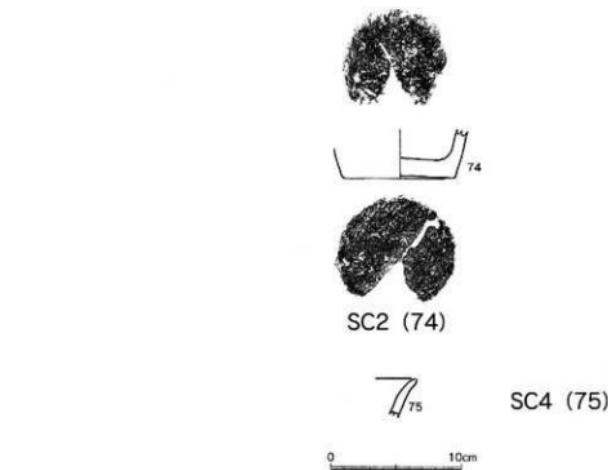


- I. 烧土。
- II. 灰褐色の粘質土で硬質。灰色のブロックを含む。
- III. 黒灰褐色で硬質。炭化物・焦土を多量に含む。

第30図 SC1・SC2・SC3遺構実測図 (S=1/60)



第31図 SC 4遺構実測図 ( $S = 1/60$ )



第32図 SC 2・SC 4遺物実測図 ( $S = 1/3$ )

## 溝状遺構 (SE1~2)

### SE1 (第3図)

本遺跡内の北側を、北東から南西にかけて走っており、両端は調査区外にそれぞれ続いている。この遺構は表土の上から掘り込まれており、調査作業員の話によると、昭和30年代ごろに、調査区南側の谷底に造成した田圃に水を引くために設けられた水路とのことである。基本的には素掘りであるが、G-3区のみ内部にセメントが敷き詰められていた。おそらくこれは、蛇行している部分が流水の浸食をともに受けないための処策だと考えられる。現存深度は20cm前後で、本来の深度はこれに表土分の50cmをプラスした70cm前後だと考えられる。

### SE2 (第3図)

遺跡内南側に位置する。L字状を呈し、H-9区あたりではほぼ直角に屈曲し、南東方向に伸びる。後世の削平を受けたためか、かなり浅い。出土遺物は破片の数点のみであった。

## 土坑 (SC1~14)

### SC1 (第30図)

G-5区に位置する。長軸約7m、短軸約2.3mで現存深度は最深部で約80cmを測る。今回確認された土坑の中では最も深いが、床面には陥穴によく見られる逆茂木痕は見られなかった。土層観察の結果、全体的にアカホヤのブロック土が入っており、一括に埋め戻されたものと考えられる。特に図示できる遺物は出土しなかった。

### SC2 (第30図)

SC1のすぐ南側に位置する。台形の隅を切り落としたような橢円形を呈する。現存深度は中央部の最深部で約40cmを測る。床面中央よりやや西側と北側の壁面に柱穴を2つ持つ。P-1が約40cmほどの深さがあるのに対し、P-2は10cmほどであった。遺構検出段階では埋土の上からは遺構らしい痕跡はなく、また本遺構のまわりにも対応するような柱穴は認められなかった。深さから考えると、P-1が本遺構に伴う柱穴かと考えられる。また、床面および埋土からは焼土や炭化物は全く認められなかった。

### 遺物 (第32図)

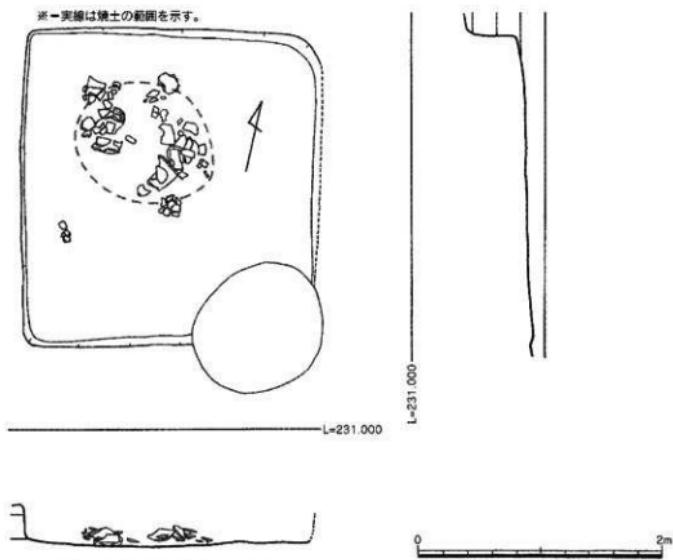
74は深鉢の底部である。全体的にナデ調整で、底部はやや上げ底である。底部の縁のやや上で少し内湾し、それから外に少し膨らむように上へのびる。

### SC3 (第30図)

E-7区に位置する。南側半分は畑地造成の際の削平により消失している。南北軸は削平のため分からぬが、東西軸が約3mあり、3m四方の竪穴状遺構と推測される。床面一面に炭化物が広がっており、特に中央部付近には焼土が赤々と残っていた。床面中央部に径50cm、深さ8cmの深い掘り込みがあり、その中から水色のガラス製の管玉が1点出土した。

### 遺物 (第42図)

土器片が数点出土したが、すべて胴部片であった。ガラス製の管玉は長さ3mm、直径3.5mmで、直径2mmほどの穴があいている。おそらく、鋳型から作ったものであろう。



第33図 SC 5 遺構実測図 (S=1/40)

#### SC4 (第31図)

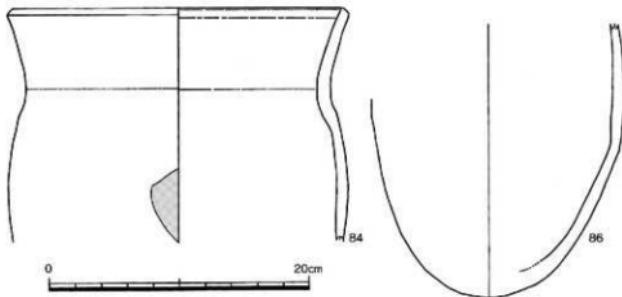
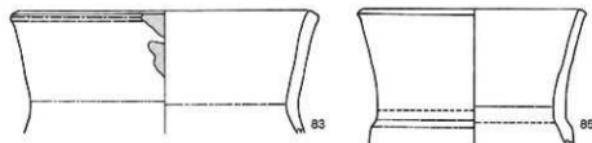
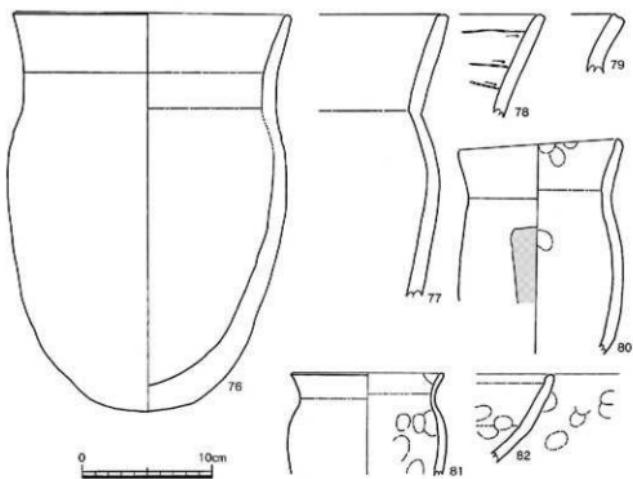
G-4区に位置し、台形の形を呈する。軸は約2.2mで、現存深度は約50cmほどである。床面に炭化物が広がっていた。土層観察の結果、床面のすぐ上に人为的に作られたと考えられる粘土層があり（I層）、その上には焼土および炭化物を含むII層が確認できた。一度床面で何かを燃やしたあと、床面を作り変え、そしてもう一度使用したものと考えられる。

#### 遺物（第32図）

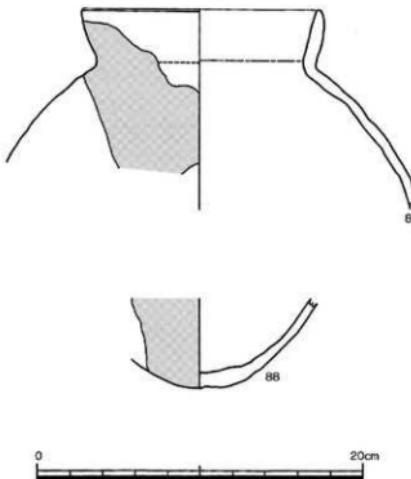
75は壺形土器の口縁部であろう。口縁部のやや下から顯著に外反する。

#### SC5 (第33図)

K-9区に位置する。SA12の西側を少し切っており、南側の一部を木の根に乱されている。遺跡自体が全体的に後世の削平を受けているため、特に標高の低い北側はわずか2・3cmほどしか遺構面が残っていないかった。方形で、約2.5m四方と考えられる。現存深度は北側の最深部で約0.6mを測る。遺構中央部より北側に遺物が集中しており、高い方から遺物を投げ捨てたものと考えられ、遺物が固まっている周りおよびその下部に焼土が確認された。埋土はブロックを多く含む黒褐色土のみであることから、土器類を捨てた後に埋め戻したものと考えられる。



第34図 SC 5遺物実測図 (1) ( $S=1/3$ )



第35図 SC5遺物実測図(2) ( $S=1/3$ )

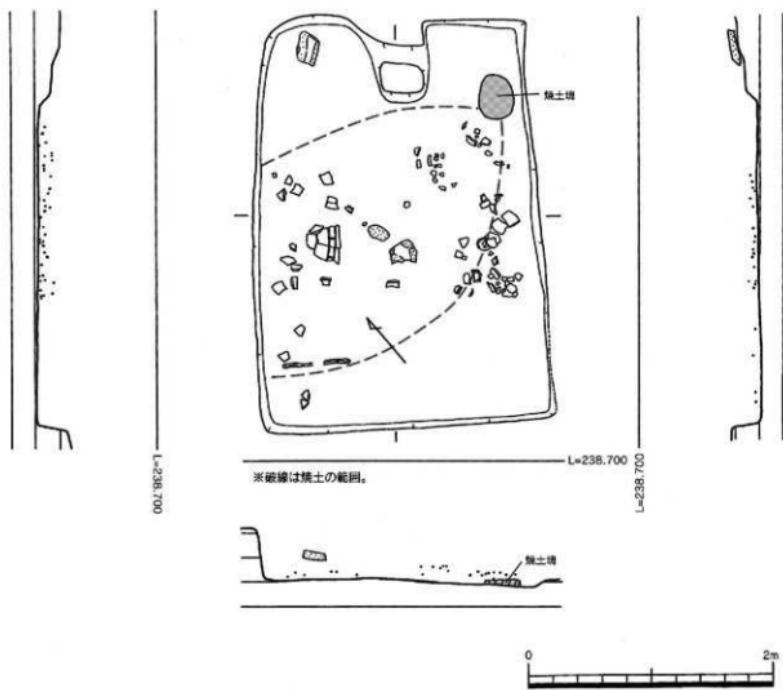
#### 遺物（第34・35図）

76から80は壺形土器である。1はほぼ完全に復元できた。高さ約31cm、最大幅は胴部中央部で約21.5cmを測る。口縁部と胴部中央部の幅はほぼ同じである。全体的に厚いつくりで、底部は約2.0cmを測る。内外面ともに古墳時代に顕著なヘラケズリ・ミガキは見られず、幾度もナデ（ヨコナデ）を繰り返したようである。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し、底部は丸底を呈する。77・78は頸部から口縁部にかけて「くの字」に外反するタイプのものである。77が内外面ともにナデ調整であるのに対し、78は内面のみをヘラケズリにより調整している。そのため、本遺構出土の土器の中では比較的丁寧さが感じられる。79は口唇部中央にくぼみを持つ口縁部である。80は小型の壺形土器。口縁部の立ち上がり方が、1の壺形土器によく似ている。外面はナデ、内面はナデとユビオサエによる。全体的に凸凹した感じである。

81・82は鉢形土器。81は薄手のつくりで、外面はナデ、内面はナデのちユビオサエによる調整である。82は81に比べ、厚手のつくりで、鉢と言ふよりは壺に似ている。現状の限り、体部から口縁部にかけて内溝するが、滑らかさはない。内外面ともにユビオサエのちにナデによる調整をほどこす。

83～86は同形態の壺形土器である。比較的薄手のつくりで、赤褐色の色調を呈し、内外面ともに剥離が激しい。そのため、詳しい調整は分かりかねるが、所々にヨコナデの痕跡が見られる。85・86は同一個体であると考えられる。4点とも口縁部の形態が76の壺形土器と同様になだらかに立ち上がる。86の底部は丸底である。

87・88は壺形土器で、口縁部が短いわゆる「短剣壺」の類であろう。両者は同一個体であろう。全体的に薄いつくりで、6～7mmほどの厚さである。内外面ともにヘラケズリによる調整であるが、これもかなり剥離が進行しているため、はっきりとは図示できなかった。復元口径14.8cmで底部は丸底を呈する。



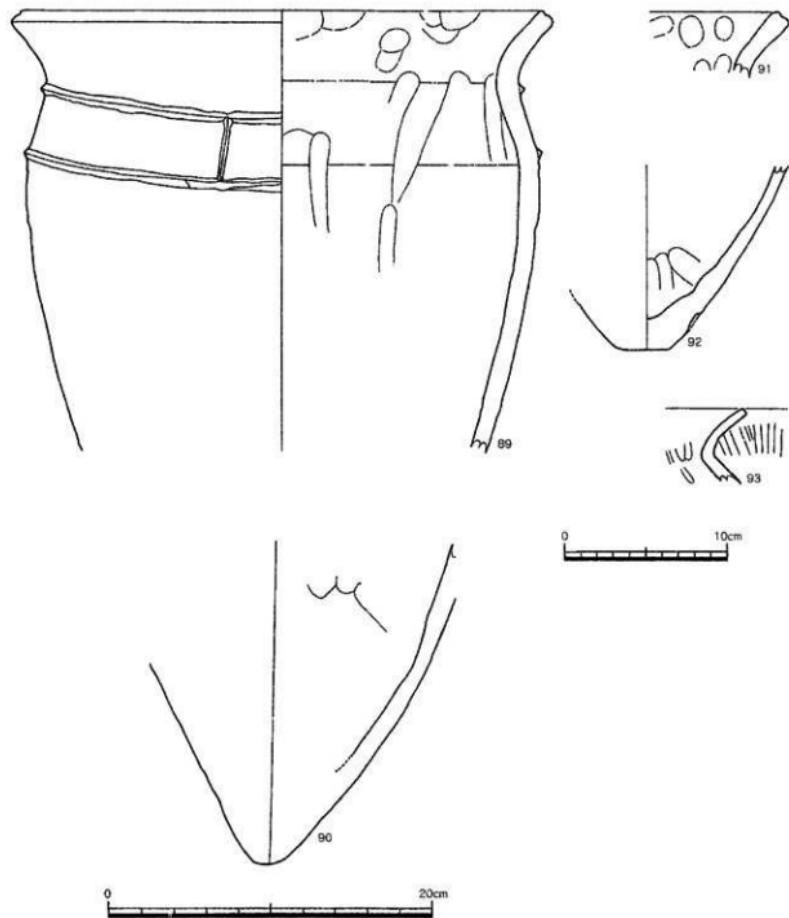
第36図 SC6遺構実測図 (S=1/40)

#### SC6（第36図）

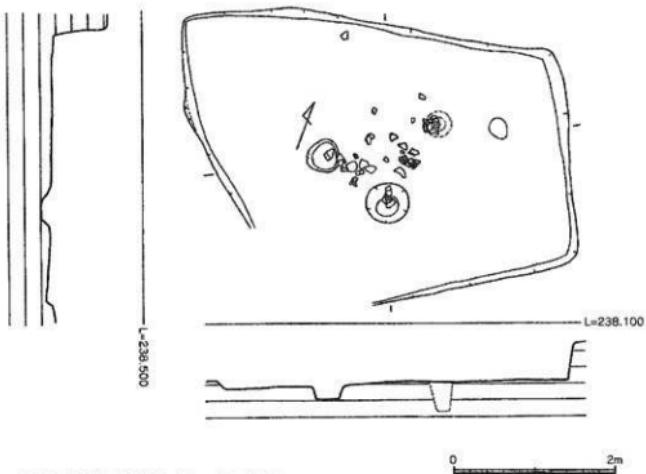
H-4区に位置する。長方形を呈し、南側の隅は後世の削平によりほとんど消失している。長軸約3.2m、短軸約2.4mで、最大深部は約0.5mを測る。また、北東部の壁際の一部が一段高くなっている。床面中央部を中心に土器類が廃棄された状態であり、主に床面中央部に焼土が確認された。

#### 遺物（第37図）

89は工字突帯文土器である。頸部付近に上下一条ずつヨコ方向の突帯をもち、現状ではタテ方向の突帯は一條である。復元口径であるが、最大径を口縁部にもち、約33.5cmを測る。頸部から口縁部にかけて滑らかに外反する。口唇部中央部にくぼみをもつ。全体的に黒褐色であるが、内面や外面の一部には茶色の部分が見え、煮炊きにより現在の色調になったのであろう。調整は内面が胴部を主にヘラケズリ、口縁部付近をナデとユビオサエ、外面は縦方向のヘラミガキによる。90は土器の形態・胎土等から1と同一個体と考えられる。底部はいわゆる「尖底形」である。91は89と同形態のものである。92は壺形土器の底部である。底部は平底で、径は3cmほどである。外面は橙色、内面は薄灰色で胎土に2mm前後の難を多く含む。調整は内面の底部付近をヘラケズリ、胴部はユビオサエのちナデ、外面はナデによる。93は壺形土器の口縁部。内面頸部付近はヘラケズリ、口縁部はヘラミガキ、外面は口縁部に縦方向の丁寧なヘラミガキをほどこし、「暗文」のような模様になっている。口唇部付近はナデによる。



第37図 SC 6遺物実測図 ( $S = 1/3$ )



第38図 SC7遺構実測図 ( $S=1/60$ )

#### SC7 (第38図)

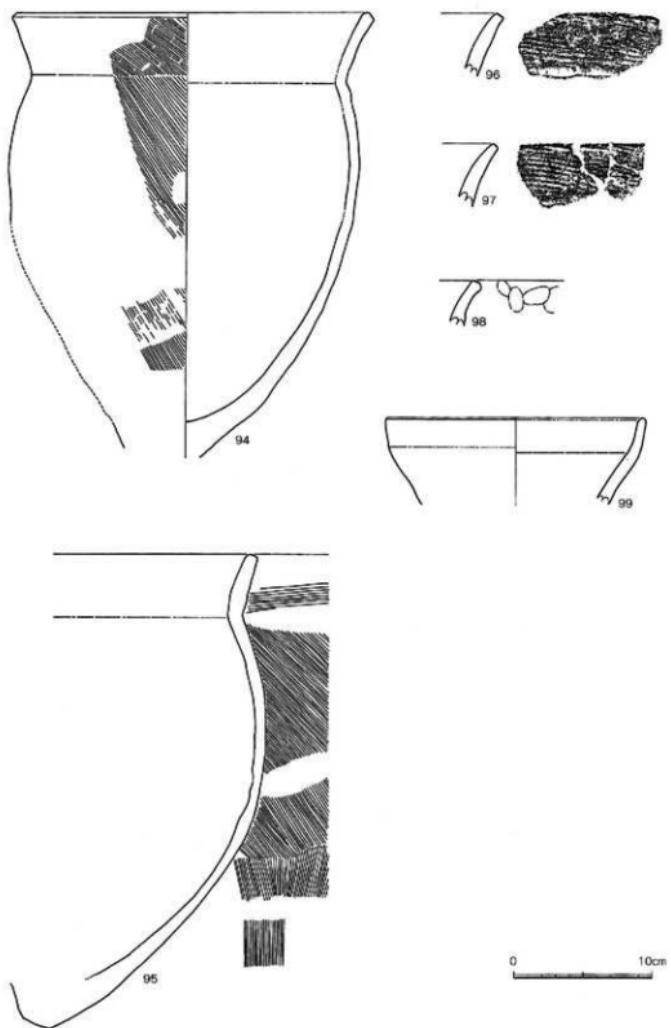
SC6の真北に位置する。西側から東側にかけて削平を受けているため、いびつな形で検出されたが、本来は長方形状であったと考えられる。現状では、長軸方向約4.6m、短軸方向約3.4mで最深部は一番西側で約0.7mを測る。ここもSC5・SC6と同様床面に土器片が廃棄された状態であったが、床面付近に顕著な燃焼跡は見られなかった。

#### 遺物 (第39図)

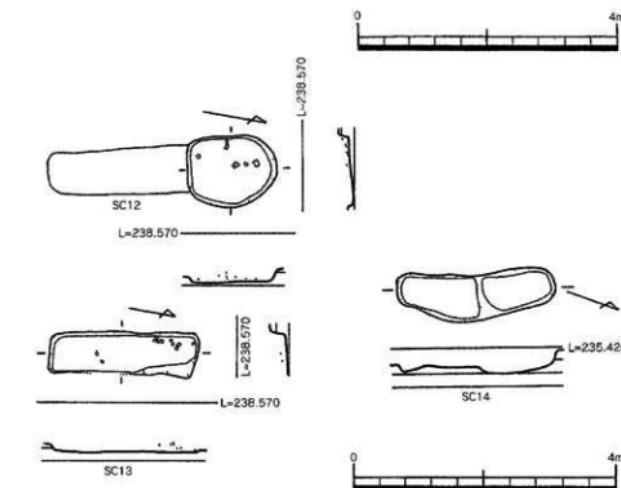
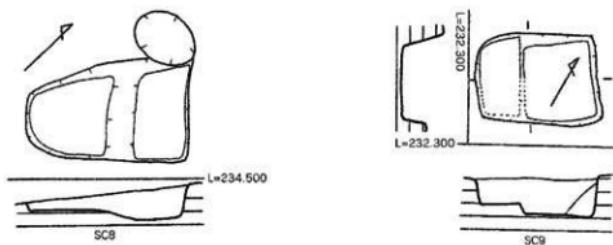
94・95は壺形土器。外面に顕著なハケメ調整をもち、色調は全体的に薄橙色で、宮崎県北部平野部によく見られる形態のものである。94は口縁部に最大径をもち、32.3cmを測る。調整は外面が顕著なハケメであるのに対して、内面はナデのみによる。95も同様の性質をもつ。

ただ、1に比べて口縁部が短く、壺自体がかなり傾いたつくりになっている。底部は両者ともにわずかに平底を残すタイプのものである。96~98は壺形土器の口縁部である。96・97は外面を横方向のハケメ調整、内面はナデ、98は内面をナデ、外面はユビオサエをほどこす。

99は鉢形土器の口縁部。内外面ともにナデ調整による。



第39図 SC 7遺物実測図 ( $S = 1/3$ )



第40図 SC8・SC9・SC10・SC11・SC12・SC13・SC14遺構実測図 (S=1/60)

#### SC8（第40図）

SC5のすぐ西側に位置する。西側は削平を受けているが、遺構自体がその深度よりも深かったので、全体プランは確認できた。長方形状で、現状では長軸約2.4m、短軸約0.8m、最深部は東側で約0.4mを測る。南の方が一段高い階段状になっている。全面に灰色の固い土が入っていた。なお、図示可能な遺物は出土しなかった。

#### SC9（第40図）

L-7区に位置し、長方形状を呈する。長軸約1.8m、短軸約1.4mで、西側が一段高くなっている。現存深度は、西側は約0.4m、東側は約0.6mを測る。  
図示可能な遺物はなかった。

#### SC10（第40図）

H-9区に位置し、SD2の上側を切り込んでいる。梢円形状で、直径0.14m、現状深度は中央部で約0.2mを測る。炭化した木片が2点床面から出土した。形状から見て焚き木に使用されたのであろう。ただ、埋土自体はかなり緩い状態であり、近代以降の所産であろう。

#### SC11（第40図）

J-4区に位置する。卵形を呈し、長軸約1.0m、短軸約0.4mで、これもSC8・SC9と同様に床面が二段になっている。ただ、削平を受けてるので、特に上の段は残りが悪い。  
ここからも明確な遺物は出土しなかった。

#### SC12（第40図）

SC7の北側約8mに位置する。卵型の形状で、長軸約0.14m、短軸約0.9mを測る。後世の削平を受けているため現存深度は約10cmほどしかない。

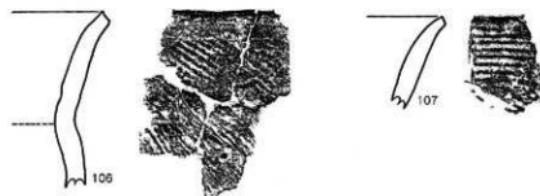
#### 遺物（第41図）

100～102は菱形土器の口縁部。100は頸部から口縁部にかけてほぼ直線状にのびるタイプのものであるが、こころもち外反する。101・102は外面にハケメ調整をもつもので、口唇部のすぐ下あたりから顕著に外反する。3点とも口唇部を平らに仕上げている。

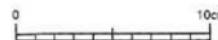
103～105は菱形土器の底部。3点とも内面をナデ調整、外面をハケメ調整による。ただ、外面は剥離が激しいため、ハケメ自体を意識的にナデ消したのかどうか分からぬ。3の内面のみハラケズリが見られる。



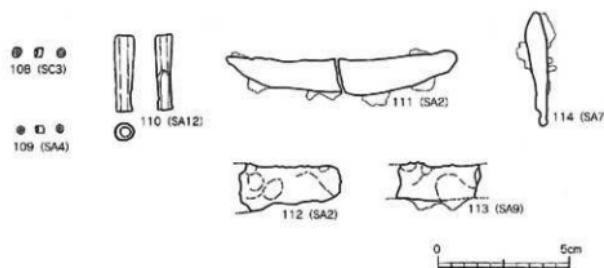
SC12



SC13



第41図 SC12・SC13遺物実測図 (S=1/2)



第42図 遺物実測図 (S=2/3)

#### SC13（第40図）

細長い溝形の形状で、北側の端部をSC12に切られている。長軸約0.22m、短軸約0.6mを測る。SC12同様、ここも現存深度は約10cmほどしかなく、残りが悪い。

#### 遺物（第41図）

106・107ともに同タイプの変形土器の口縁部である。口唇部は平らである。口唇部の下から外反する。1の外面がハケメ調整による以外は、ナデ調整による。

#### SC14（第40図）

SA11のすぐ東側に位置する。長軸約2.4m、短軸約0.7mで、現存深度は最深部で約0.36mを測る。南側から北側に向かってなだらかに傾斜している。特に目だった出土遺物はなかった。

#### その他の出土遺物（第42図）

108・109はガラス製の管玉。2点とも直径は3mmほどで、穴の直径は1mmほどである。鋳型から作られたもののように、切り口が斜めになっており、丁寧に成型されたものではない。

110は緑色凝灰岩製の管玉である。長さ2.9cm、直径6.5mm、穴の直径は3.5mmを測る。図面下の方が欠損している。

111～114は鉄器。111は刀子である。出土時は二つに分かれていたが、同一のものである。両端は欠損していない。全長8.8cm、厚さは中央部で4mmを測る。112も刀子かと思われる。これも厚さは4mmほどで、柄の部分のみが出土した。113は両端が欠損しているので明確には分からぬ。厚さは2mmほどである。114は鉄鎌の先形品。全長4.4cmで、先端部分がわずかに欠けている。

### 縄文時代の土器（第43・44図）

ここでは、弥生時代以降の遺構から出土した縄文時代の土器を一括掲載する。図面中の（ ）内は出土した遺構を示す。ここでは口縁部に突帯をもつ深鉢の口縁部のみを便宜上、おおまかに四つの形態に分類した。なお、調整・焼成等はページの土器観察表に掲載したので、ここでは割愛する。

A-1・・・つまみ出しの突帯をもち、ほぼ直線状にのびる口縁をもつ。1~18（第42図）がこの形態に相当する。中には内面口縁部が外反気味にひらくものも見られるが、全体に外反しないものは全てこのタイプに帰属させた。

A-2・・・貼付の突帯をもち、ほぼ直線状にのびる口縁をもつ。19~23（第42図）が相当する。これらは、A-1とは突帯の造作の仕方が異なるのみである。

B-1・・・つまみ出しの突帯をもち、外反する口縁をもつ。24~38（第42図）が相当する。A-1との相違は、小片であっても全体的に外反する様相をもつものはこの範疇に入れた。A-1の次に出土量が多い。

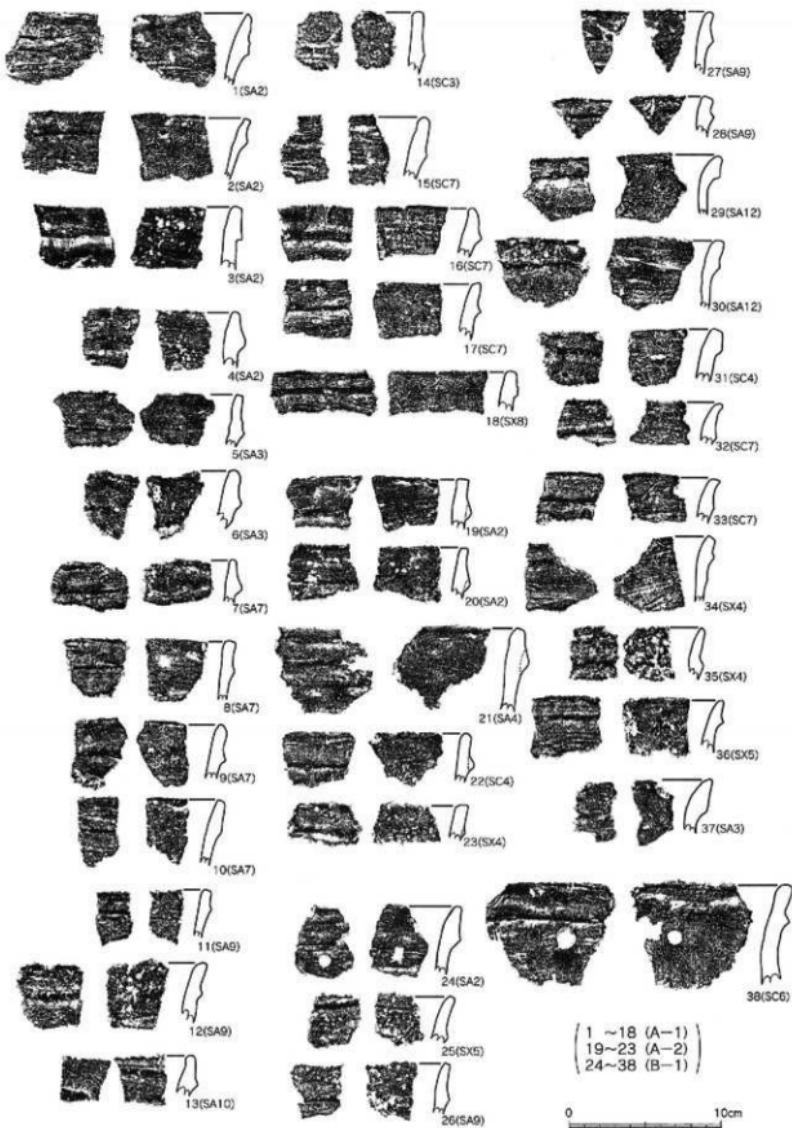
B-2・・・貼付の突帯をもち、外反する口縁をもつ。39~43（第43図）が相当する。これも突帯の造作方法の相違だけである。

### その他のもの（第43図-44~66）

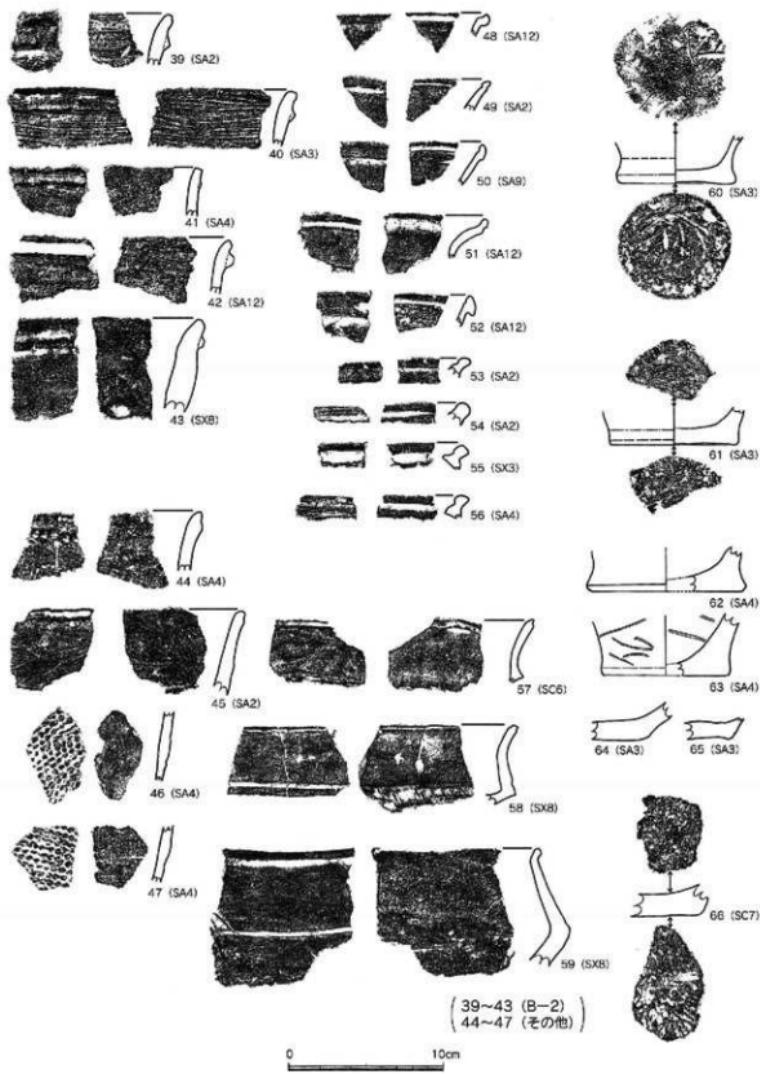
44は突帯部に円形の刺突文をもつ。形態的にはB-1に属する。45はつまみ出しの突帯をもつが、少々形態が異なる。しいて言えば、A-1に属する。46・47は組織痕をもつ洞部片である。

48~59は浅鉢の口縁部である。48~56は口縁部が如意輪状に外反する形態のものである。57から59は頸部から口縁部にかけて「逆くの字」に屈曲するもので、57・58は精製の「黒色磨研」土器で、両面とも黒色に磨かれている。59は前者にくらべれば、粗製の部類に入る。

60~66は深鉢の底部。60~63は程度の差はある、端部が外側に張り出すもの、64~66はそのまま体部にのびるものである。



第43図 繩文土器実測図（1）（S=1/3）



第44図 桐文土器実測図 (2) (S=1/3)

## 石器（第45～50図）

平底遺跡出土の石器を一括掲載する。図面中の（ ）内は出土した遺構を示す。

1～3（第45図）はいずれもチャート製の打製石鎌である。1は先端が、2は端部がそれぞれ破損している。3は両端がかなりギザギザしており、意識的に刃のように仕上げたものであろう。4（第45図）は頁岩製の磨製石鎌。先端部分は破損している。中央から下の部分にかけて黒いススのようなものが付着している。5・6（第45図）はチャート製の尖頭状石器。見て分かるように、あまり丁寧にはつくられてはいない。その名のとおり、先端部だけを使用していたのであろう。7（第45図）はチャート製の石核。主に端の部分を中心に石材を打ち出している。

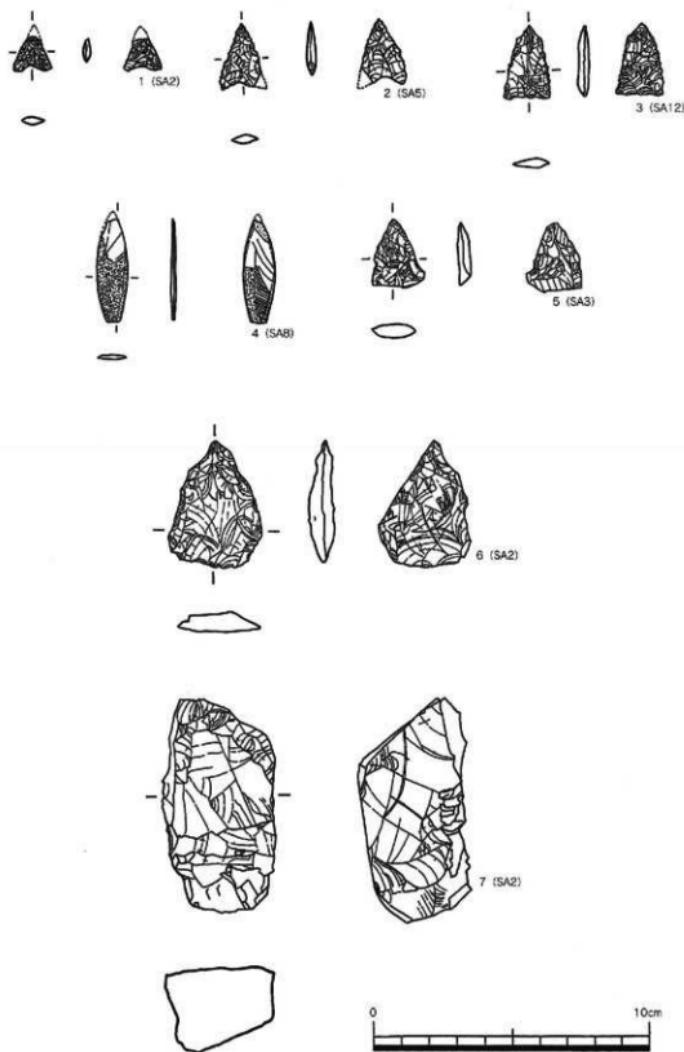
8（第46図）は砂岩製の摺石か。片面は使用されたためか、平らになっており、側面も磨かれた感がある。その面の真中ほどに直径2mm、深さ2mmほどの穴をうがっている。9・10（第46図）はチャート製の敲石。両者ともにまんべんなく全体を使用している。11（第46図）は砂岩製の擦石。片面のみが平らになっている。12（第46図）は片岩製のスクレイパー。端の細い部分のみに使用痕が認められる。

13・14・16（第47図）は偏平形打製石器。13・14は頁岩製、16は片岩製である。14は端の部分を打ちかいて、わりあい丁寧につくられている。15（第47図）は頁岩製の石匙。使用部のやや上あたりがしまったようになっており、この部分にヒモのようなものを巻きつけて使用したのだろうか。

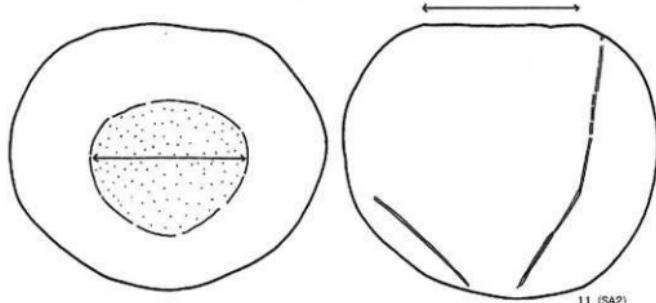
17～20は砥石（第48図）。4点とも砂岩製ですべて欠損しており、原型をとどめているものはない。

21～26（第49図）は打製石斧。21は頁岩製、22は片岩製である。23～26は凝灰岩製。23のみ握り柄の部分が明確につくられている。

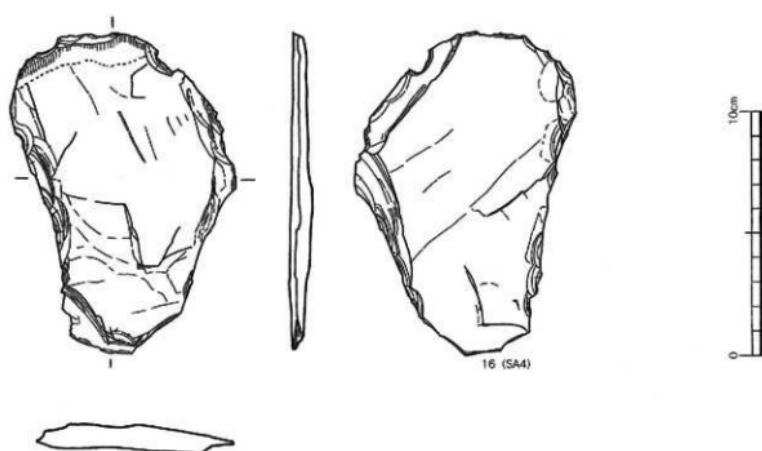
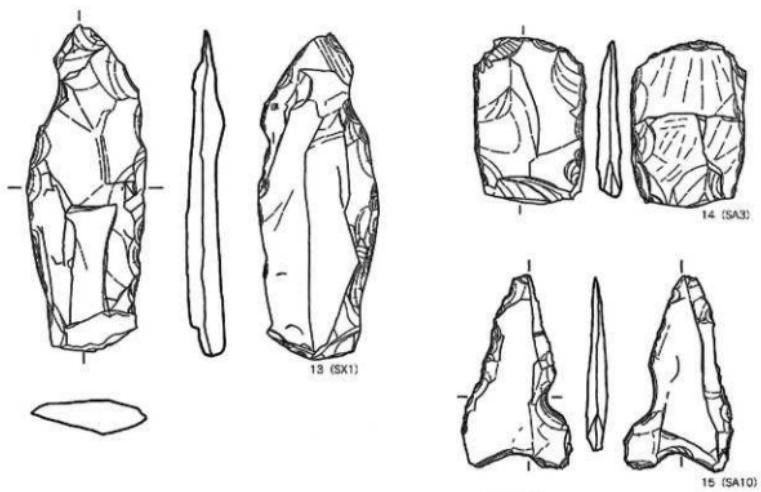
27～29（第50図）は磨製石斧。27・28は砂岩製。29は先端部分のみであるが、両面に細かい掻き跡があり、破損した後に砥石として再利用されたようである。29は先端部および握り柄の部分が欠損している。



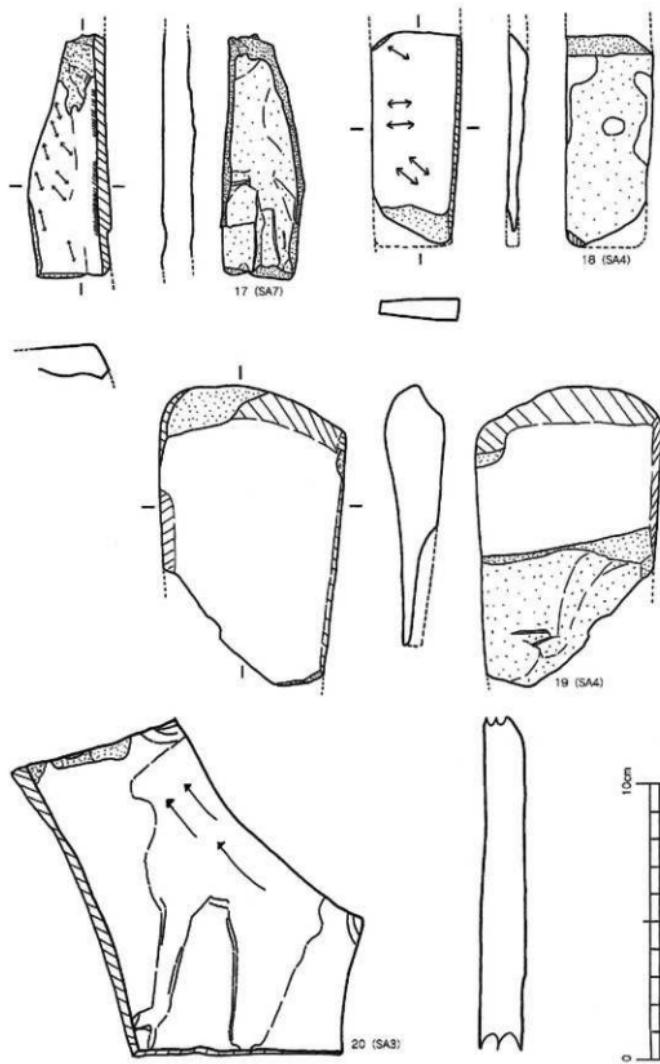
第45図 石器実測図 (1) ( $S=1/3$ )



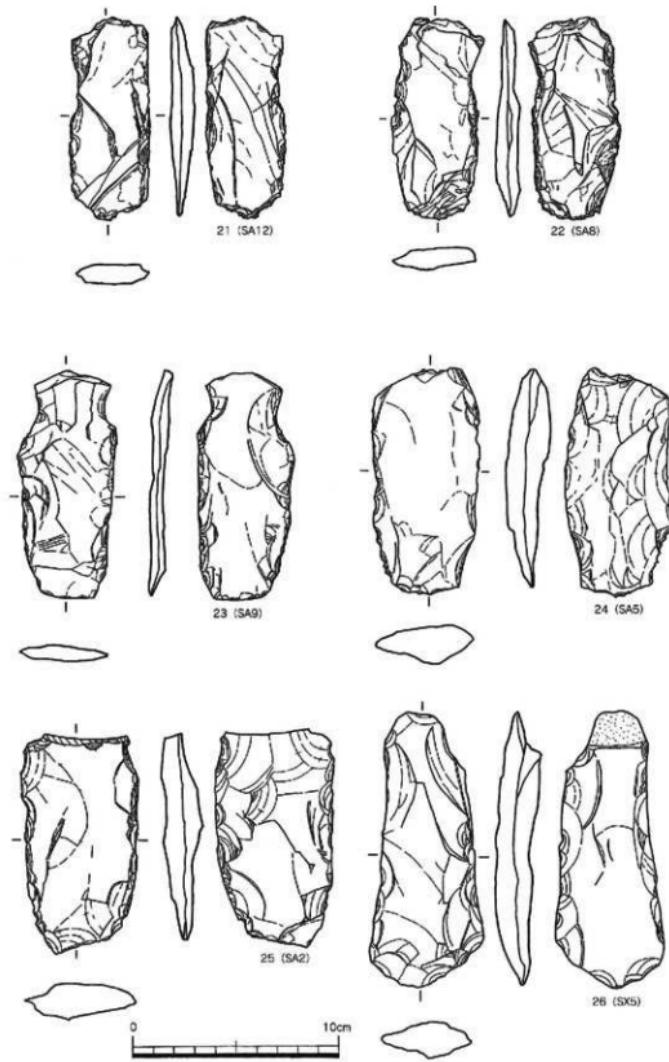
第46図 石器実測図 (2) (S=2/3)



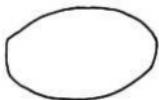
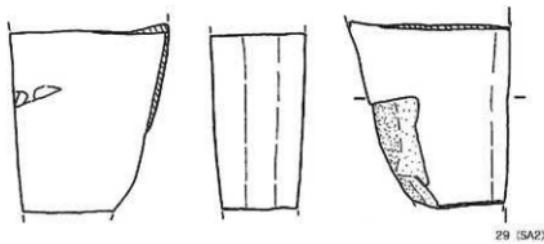
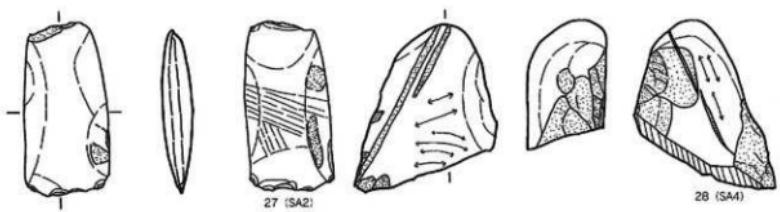
第47図 石器実測図 (3) ( $S = 1/2$ )



第48図 石器実測図 (4) ( $S = 2/3$ )



第49図 石器実測図 (5) ( $S=1/2$ )



第50図 石器実測図 (6) ( $S=1/2$ )

# 第3章 化学分析

## 第1節 SA2出土のドングリの年代測定

日之影町、平底遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

### 1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SA2, 1層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS

※AMSは加速器質量分析法：Accelerator Mass Spectrometry

### 2. 測定結果

試料名	$^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ 年代 (年BP)	曆年代（西暦）	測定No. (Beta-)
No.1	1730±40	-24.7	1730±40	交点: calAD 330 $1\sigma$ : calAD 250~380 $2\sigma$ : calAD 230~410	180124

#### 1) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

#### 2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PD B) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

#### 3) 補正 $^{14}\text{C}$ 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

#### 4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動を校正することにより算出した年代（西暦）。校正には、年代既知の樹木年輪の $^{14}\text{C}$ の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と $^{14}\text{C}$ 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約 19,000 年 BPまでの換算

が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正<sup>14</sup>C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 $1\sigma$  (6.8%確率) と  $2\sigma$  (95%確率) は、補正<sup>14</sup>C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma$ ・ $2\sigma$ 値が表記される場合もある。

### 3. 考察

放射性炭素年代測定の結果、SA2の炭化物では $1730 \pm 40$ 年BP ( $1\sigma$ の暦年代でAD250~380年) の年代値が得られた。なお、放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅が大きくなっているが、これは該当時期の暦年代較正曲線が不安定なためである。

### 文献

- Stuiver, M., et. al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.  
中村俊夫 (1999) 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

## 第2節 側溝形遺構（SX1・2）の埋土分析

日之影町、平底遺跡における側溝形遺構分析  
株式会社 古環境研究所

### 1.はじめに

トイレ遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において特異性を示す。これらの特徴から他の堆積物と区別され、トイレ遺構を識別することができる。また、その遺体群集から摂取された食物の種類を推定することも可能である。

### 2. 試料

試料は、SX1の堆積物（黒褐色土）およびSX2の堆積物（黒褐色土）から採取された計2点である。これらの試料について、寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定を行った。

### 3. 寄生虫卵分析

#### (1) 原理

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

#### (2) 方法

微化石分析法を基本に、以下のように行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 脱イオン水を加えて搅拌
- 3) 銅別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
- 4) 25% フッ化水素酸を加えて30分静置（2~3度混和）
- 5) 遠心分離（1500rpm、2分間）による水洗の後にサンプルを2分割
- 6) 片方にアセトトリス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 檢鏡・計数

#### (3) 結果

分析の結果、寄生虫卵および明らかな消化残渣は、いずれの試料からも検出されなかった。

### 4. 花粉分析

#### (1) 原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### (2) 方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5% 水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの飼で穢などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

- 3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトトリス処理を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(ー)で結んで示した。

### (3) 結果

#### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、草本花粉8、シダ植物胞子2形態の計21である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

##### [樹木花粉]

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スキ、クマシデ属ーアサダ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、サンショウ属、ニワトコ属ーガマズミ属

##### [草本花粉]

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、ノブドウ、セリ亞科、タンボボ亜科、キク亜科、ヨモギ属

##### [シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

#### 2) 花粉群集の特徴

SX1では、花粉密度が低く、樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科やヨモギ属が多く、アブラナ科、タンボボ亜科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、モミ属、クマシデ属ーアサダ、コナラ属コナラ亜属、ニレ属ーケヤキが認められる。

SX2では、花粉密度が低く、樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が高い。草本花粉ではイネ科やヨモギ属が多く、アブラナ科やキク亜科が伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、シイ属などが認められる。

#### 5. 種実同定

##### (1) 原理

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

##### (2) 方法

以下の方法で、種実の抽出と同定を行った。

- 1) 試料200ccに水を加えて泥化
- 2) 擺拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比を行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### (3) 結果

分析の結果、種実はいずれの試料からも検出されなかった。

## 6. 考察

### (1) トイレ遺構の可能性について

SX1およびSX2の堆積物からは、花粉は少量検出されたものの、寄生虫卵、明らかな消化残渣、種実はまったく検出されなかつた。花粉は寄生虫卵と同様の残存性を示すことから、寄生虫卵のみが分解・消失したことは考えにくい。したがって、各遺構の堆積物に糞便が含まれている可能性は低いと考えられ、各遺構がトイレ遺構である可能性も低いと考えられる。

### (2) 周辺の植生・環境について

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、各遺構の周辺はイネ科、ヨモギ属、シダ植物などの草本類が生育する比較的乾燥した堆積環境であったと考えられ、遺跡周辺にはカシ類などの森林が分布していたと推定される。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥的な堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

## 文献

- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
- 金原正明・金原正子(1992)花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－,奈良国立文化財研究所, p.14-15.
- 金子清俊・谷口博・(1987) 線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.
- 金原正明(1999) 寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.
- 中村純(1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- 金原正明(1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎(1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純(1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- 笠原安夫(1985) 日本雜草図説. 美賢堂, 494p.
- 笠原安夫(1988) 作物および田畠雜草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣出版, p.131-139.
- 南木睦彦(1992) 低湿地遺跡の種実. 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.18-22.
- 南木睦彦(1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.

第1表 遺構出土遺物観察表

No	遺構	器種・部位	調 整	色 製	胎 土		備 考
					内面	外面	
1 SA1	深鉢・口縁部	内:ナデ 外:ナデ		薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英が多く、長石も少量含む。		縄文晚期 つまみ出し実器
2 SA1	深鉢・口縁部	内:剥離がはげしく、不明 外:ナデ		薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英が多く、灰色・白色粒子も含む。長石は少量。		縄文晚期 貼付実器
3 SA2	鉢・口縁部	内:口縁部はハケ目 外:口縁部はヨコナデ その他はハケ目		暗褐色・暗褐色	石英・長石・白色粒子を含む。		
4 SA2	壺・口縁部	内:ナデとユビオサエ 外:ナデとユビオサエ		茶褐色・茶褐色	石英が多く、角閃石・褐色粒子も含む。 褐色粒子が少量入る。	両面にススが付着。	
5 SA2	鉢・底部	内:不明 外:底部はユビオサエ その他はナデ		暗褐色・暗褐色	角閃石・石英が多く、白色粒子も含む。	合付鉢か?	
6 SA2	高环?・縦部	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ?		薄灰色・薄灰色	白色粒子が多い。褐色・赤色粒子も含む。		須恵器。三角突起をもち、外間に自然粒が付着する。
7 SA3	壺?・口縁部	内:ナデとユビオサエ 外:ハケ目へ一部削耗		茶褐色・薄褐色	黒色粒子・2mmほどの礫が多い。角閃石 石灰はわずか。		須恵器後期後葉一終末
8 SA4	壺・口縁部	内:ヨコナデのちユビオサエ 外:ヨコナデ		薄赤褐色・薄茶褐色	石英・褐色粒子が多い。角閃石・長石 白色粒子も少量含む。		両面にススが付着。
9 SA4	壺・口縁部	内:ヨコナデのちユビオサエ 外:ヨコナデ 口縁部はユビオサエ		薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英を含み、白色粒子も少量 含む。		両面にススが付着。
10 SA4	壺・口縁部	内:ナデのちユビオサエ 外:ナデ		茶褐色・茶褐色	角閃石・石英・褐色粒子が入る。 長石・褐色粒子も少量含む。		両面にススが付着。
11 SA4	壺・口縁部	内:ヨコナデ 外:不明		赤褐色・赤褐色	角閃石が多い。石英・白色粒子・褐色粒子 も少量含む。		両面にススが付着。
12 SA4	壺・口縁部	内:ナデ 外:ヨコナデ		茶褐色・茶褐色	石英・褐色粒子が多く、長石・角閃石も少 量含む。		
13 SA4	壺・口縁部	内:ナデ 外:ナデ		暗赤褐色・暗赤褐色	石英・角閃石が多く、褐色・白色粒子も少 量含む。		両面にススが付着。
14 SA4	壺・口縁部	内:ヨコナデ 外:ナデ		黒褐色・暗赤褐色	石英・透明光沢粒子が多く、角閃石も 含む。長石はわずか。		
15 SA4	壺・口縁部	内:口縁部はユビオサエ 他ヨコナデ 外:ナデ		薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英が多く、白色粒子も含む。 長石はわずか。		
16 SA4	壺・口縁部	内:ナデ 外:ナデ		薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英が多い。長石・黑色・白色 粒子も含む。		
17 SA4	壺・口縁部	内:剥離がはげしく、不明 外:ナデ		薄茶色・赤褐色	石英・角閃石が多く、長石はわずか。		
18 SA4	壺・口縁部	内:口縁部はユビオサエ その他はナデ 外:同上		暗赤褐色・暗赤褐色	角閃石・石英・長石・褐色粒子を含む。		
19 SA4	环?・口縁部	内:ナデ 外:ナデ		灰褐色・暗色	石英が多く、角閃石・白色粒子・黑色 粒子も含む。		
20 SA4	环?・口縁部	内:ナデへハラミガキ 外:ヨコナデ		褐色・棕色	角閃石・石英・白色・黑色粒子を含む。 長石はわずか。		
21 SA4	环?・口縁部	内:ナデ 外:ヨコナデ		褐色・薄褐色	角閃石・石英を含む。長石も少量含む。		
22 SA4	?・口縁部	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ		薄褐色・褐色	石英・黑色・白色粒子を含む。		
23 SA4	环?・口縁部	内:剥離がはげしく、不明 外:丁寧なヨコナデ		褐色・薄褐色	灰白色粒子が多く、石英・黑色粒子も 含む。		
24 SA4	环?・口縁部	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ		茶褐色・赤褐色	石英が多く、角閃石・白色粒子も少 量含む。		
25 SA4	?・口縁部	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ		褐色・棕色	透明光沢粒子が多い。角閃石・褐色・ 褐色粒子も少量含む。		
26 SA4	高环・周縁	内:丁寧なナデ 外:ナデ		褐色・棕色	1~2mmの礫が多い。石英・灰色粒子も 少量含む。		エンタシス状に ふくらむ。
27 SA4	高环・周縁	内:粗いハラケズリ 外:丁寧なナデ		薄褐色・薄褐色	赤褐色粒子が多く、2mm前後の礫が含む。 白色・黑色粒子も少量入る。		
28 SA4	高环?・縦部	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ		薄灰色・薄灰色	白色・褐色粒子を含む。		須恵器。三角突起を もち、外間に自然粒 が付着する。
29 SA5	深鉢・口縁部	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ		赤褐色・赤褐色	石英が多く、角閃石・長石・白色・褐色 粒子を少量含む。		
30 SA5	浅鉢・口縁部	内:ナデ 外:ナデ		赤褐色・赤褐色	全色の粒子を多く含む。角閃石・黑色粒子も 少量含む。		内部に沈線をもつ。
31 SA5	深鉢・底部	内:剥離がはげしく、不明 外:ナデ		薄赤褐色・薄褐色	角閃石・石英が多く、長石・白色粒子も含 む。		
32 SA5	深鉢・底部	内:粗いハラケズリ 外:ヘラケズリのちナデ		茶褐色・茶褐色	角閃石・石英・白色粒子を多く含む。 長石も少量含む。		縄文晚期 つまみ出し実器

第2表 造構出土遺物観察表(2)

No.	造構	器種・部位	調 整	色 調	胎 土	備 考
			内面・外面			
33	SA7	壺・口縁部	内: ヘラケズリ 外: タテ方向のナデ	薄褐色・薄褐色	石英・透明光沢粒子・黑色粒子を含む。	
34	SA7	?・口縁部	内:ミガキ 外:ミガキ	薄茶褐色・赤褐色	透明光沢粒子が多く、黑色粒子・角閃石も少量含む。	
35	SA8	壺?・底部	内: ビオオサエ 外:ハケ目	灰色・薄褐色	2mmほどの礫が多い。透明光沢粒子が少量入る。	
36	SA9	壺・口縲部	内: 刻離が激しく不明 外:開口	薄茶褐色・赤褐色	石英・2mmほどの礫が多い。角閃石・長石・灰色・黑色粒子も少量含む。	
37	SA9	壺・口縲部	内: ナデ 外: ナデ?	薄赤褐色・褐色	角閃石・石英が多い。白色・褐色粒子も少量含む。	外面にススが塗られている。
38	SA9	壺・口縲部	内: ナデ 外: ナデ?	薄赤褐色・黒色	石英・黑色粒子が多く、角閃石も含む。白色・褐色粒子も少量含む。	外面にススが塗られている。
39	SA9	壺・口縲部	内: ナデのちユビオサエ 外: ヨコナデ	褐褐色・黒色	角閃石・石英を含む。白色粒子も少量含む。	
40	SA9	壺・口縲部	内: 丁寧なナデ 外: 丁寧なナデ	濃系褐色・濃茶褐色	石英・透明光沢粒子が多く、褐色粒子も含む。角閃石・長石・白色粒子も少量含む。	
41	SA9	壺・口縲部	内: ヘラケズリのちナデ 外: ナデ	黒褐色・茶褐色	石英が多く、角閃石・長石・褐色粒子も含む。白色・褐色粒子も少量含む。	
42	SA9	壺・口縲部	内: ナデ 外: ナデ	茶褐色・黒色	角閃石・石英が多く、褐色・白色・褐色粒子も少量含む。	外面にススが塗られている。
43	SA9	壺・口縲部	内: ナデのちユビオサエ 外: ナデ	褐褐色・黒色	石英が多く、角閃石・黑色粒子も含む。黑色・褐色粒子も少量含む。	外面にススが塗られている?
44	SA9	壺・口縲部	内: 丁寧なナデ 外: 丁寧なナデ	暗茶褐色・黒褐色	石英を含む。角閃石・2mmほどの礫、白色・褐色粒子も少量入る。	
45	SA9	壺・口縲部	内: 直ハラケズリ? 外: ミガキ	暗赤褐色・茶褐色	石英が多く、角閃石・白色粒子も含む。褐色粒子も少量含む。	外面にススが付着。
46	SA9	壺?・底部	内: ナデ 外: ハラケズリ	茶褐色・薄茶褐色	褐色粒子が多く、角閃石・石英・長石・白色粒子も含む。	外面にススが付着。
47	SA9	壺?・底部	内: ナデのちユビオサエ 外: ナデ	薄褐色・薄褐色	角閃石・黑色粒子が多く、石英・長石も少量含む。	
48	SA9	壺?・底部	内: ナデ 外: ナデ	赤褐色・薄赤褐色	石英・褐色粒子を含み、角閃石も少量含む。	
49	SA9	壺?・口縲部	内: ナデ 外: 口縲部はナデ 体部はヘラケズリ	褐色・薄褐色	赤色粒子が多く、石英・灰色・黑色粒子も少量含む。	口縲部が外反する。
50	SA9	壺?・口縲部	内: ナデ 外: 口縲部はナデ 体部はヘラケズリ	褐色・褐色	赤色粒子が多く、石英・黑色粒子を少量含む。	口縲部が外反する。
51	SA9	壺?・口縲部	内: ナデ 外: 口縲部はナデ 体部はヘラケズリ	褐色・薄褐色	赤色粒子が多く、石英・灰色・黑色粒子を少量含む。	口縲部が外反する。
52	SA9	壺?・口縲部	内: ナデ 外: 口縲部はナデ 体部はヘラケズリ	褐褐色・薄茶褐色	赤色粒子が多く、石英・褐色粒子を少量含む。	口縲部が外反する。
53	SA9	壺?・口縲部	内: ナデ 外: 口縲部はナデ 体部はヘラケズリ	褐褐色・薄茶褐色	赤色粒子が多く、石英・黑色粒子も少量含む。	
54	SA9	?・口縲部	内: ナデ 外: ナデ	薄褐色・薄褐色	金色粒子を多く含み。角閃石・石英も含む。白色・黑色粒子・礫も少量含む。	I形式-2段階
55	SA9	壺?・頸部	内: ヨコナデ 外: ナデ	褐褐色・褐色	金色粒子を多く含み、石英・白色粒子も少量含む。	
56	SA9	环身・口縲部	内: ヨコナデ 外: 回転ナデ	薄灰色・薄灰色	黑色粒子が多く、褐色粒子も少量含む。	須恵器 I形式-2段階
57	SA9	环身	内: ヨコナデ 外: 回転ナデ	薄灰色・薄灰色	黑色・褐色粒子を多く含み、白色粒子も少量含む。	須恵器 I形式-3段階
58	SA9	高坏・胸窓	内: 回転ナデ 外: ヨコナデ	暗灰色・暗灰色	白色粒子を多く含む。	須恵器 松山產 I形式-3段階
59	SA10	壺・口縲部	内: ナデ 外: ナデ	赤褐色・黒色(スス)	石英が多く、角閃石・長石・黑色・白色粒子も少量含む。	外面にススが付着。
60	SA10	壺・口縲部	内: ヨコナデ 外: ナデ	褐色・黒色	石英が多く、角閃石・黑色粒子も含む。	外面にススが付着。
61	SA10	壺・口縲部	内: ナデ 外: ナデ	黒面とも黒色	角閃石・石英・白色粒子を多く含み、透明光沢粒子も含む。長石はわずか。	外面にススが付着。
62	SA11	高坏・胸窓	内: 直いハラケズリ 外: 丁寧なナデ	黒面とも褐色	白色粒子が多く、長石・灰色粒子も含む。	
63	SA12	壺・頸部	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	薄黄褐色・薄橙色	石英・赤色・黑色粒子を多く含み、1mm大の礫も多。長石・白色粒子も少量含む。	須恵器 貼付刮削突帯をもつ。
64	SX1	跡?・口縲部	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英が多く、白色・褐色粒子も含む。長石はわずか。	
65	SX1	壺・口縲部	内: ヨコナデ 外: ヨコナデ	赤褐色・赤褐色	石英・角閃石・白色・褐色粒子を含む。	外面にススが付着。

第3表 遺構出土遺物観察表（3）

No.	遺構	基準・部位	調 整	色 調 内面・外面	胎 土		備 考
					胎	土	
66	SX3	蓋・口縁部	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	深褐色・茶褐色	石英・角閃石が多く、白色・褐色粒子も少 量含む。	口縁部附近にススが付着する。	
67	SX3	蓋・口縁部	内：ヨコナデ 外：ヘラミズリ	深褐色・茶褐色	石英・角閃石が多く、白色・褐色粒子も少 量含む。	口縁部附近にススが付着される。	
68	SX3	?・口縁部	内：ミガキ 外：やや粗いミガキ	深褐色・茶褐色	角閃石・白色粒子が多く、石英も含む。		
69	SX5	蓋・口縁部	内：ナデのちユビオサエ 外：ヨコナデ	黒色	角閃石・石英・褐色・褐色粒子も含む。	全面にススが付着。	
70	SX4	?・口縁部	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	薄褐色・薄褐色	赤色・黑色粒子が多く、石英・角閃石も少 量含む。		
71	SX4	?・底部	内面と側面がはげしく、不明。	赤褐色・赤褐色	角閃石・石英が多く、長石・白色・褐色 粒子も少量含む。	縄文土器？	
72	SX4	环身・口縁部		薄灰色・薄灰色			須恵器
73	SXB	蓋	内：ユビオサエのちナデ 外：ナデ	薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英を含み、長石・2mmほどの 褐色・白色粒子も少量含む。	須恵土器でつくりが 良い。	
74	SC2	蓋鉢・底部	内：ナデ 外：ナデ	黒褐色・黒褐色	角閃石・石英・白色粒子が多く、長石・ 透明光沢粒子も含む。		縄文晩期
75	SC4	?・口縁部	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	褐色・薄褐色	石英・長石・白色・灰色・赤色粒子を 含む。		
76	SC5	蓋・変形	内：基本的にヨコナデ。所々に 浅いハビオサエがある。 外：ヨコナデ	薄茶褐色・薄茶褐色	角閃石・石英が多く、長石・黑色粒子も 含む。白色粒子も少量含む。		須恵がなだらか。 土器器
77	SC5	蓋	内：ナデ 外：ナデ	茶褐色・褐色	角閃石・石英が多く、長石も含む。白色・ 褐色粒子も少量含む。		須恵は「くの字」状 土器器
78	SC5	蓋・口縁部	内：横方向のヘラミガキ 外：丁寧なヨコナデ	深茶褐色・深茶褐色	角閃石・石英多く、赤色・白色粒子も 含む。表面はわざか。		須恵は「くの字」状 土器器
79	SC5	蓋・口縁部	内：粗いハラケズリ 外：ヘラミズリのちナデ	茶褐色・茶褐色	角閃石・石英が多く、白色粒子も含む。 表面はわざか。		
80	SC5	蓋	内：ナデのちユビオサエ 外：ナデ	茶褐色・褐色	角閃石・石英が多く、長石・2mmほどの 白色粒子も少量含む。		須恵がなだらか。 土器器
81	SC5	鉢・口縁部	内：ナデのちユビオサエ 外：ナデ	赤褐色・赤褐色	角閃石・石英が多く、透明光沢粒子も 目立つ。表面はわざか。		須恵器
82	SC5	鉢・?・口縁部	内：ユビオサエのちナデ 外：ユビオサエのちナデ	暗褐色・薄褐色	角閃石・石英が多く、白色・灰色粒子も 少量含む。		土器器
83	SC5	蓋・口縁部	内：ナデ 外：ナデ	赤褐色・茶褐色	角閃石・石英・褐色粒子を多く含む。 長石・白色・黑色粒子も少量含む。		須恵がなだらか。 土器器
84	SC5	蓋	内：ナデ 外：ナデ	褐色・褐色	角閃石・石英・黑色粒子が多く、長石・ 白色・褐色粒子も含む。2mmほどの褐色 粒子も含む。		須恵がなだらか。 土器器
85	SC5	蓋・口縁部	内：ナデ 外：ナデ	赤褐色・赤褐色	角閃石・石英・褐色粒子を多く含む。長石・ 白色・褐色粒子も少量含む。		須恵がなだらか。 土器器
86	SC5	蓋・底部	内：ナデ 外：剥離が激しく、不明。	暗褐色・赤褐色	角閃石が多く、石英・褐色・黑色粒子も 含む。白色粒子も少量含む。	85と同一個体タ。	
87	SC5	蓋・口縁部	内面ともハラケズリを施すが、 剥離が激しく、明確にはわか らない。	薄褐色・薄褐色	白色粒子・長石を含む。	須恵器	土器器 外面にスス付着。
88	SC5	蓋・?・直鉢	87と同じ	87と同じ	87と同じ	87と同一個体で ある。	
89	SC6	蓋	内：ヘラケズリ?	暗褐色・暗褐色	角閃石・長石が多く、黒色・白色・褐色 粒子も含む。表面はわざか。		工字突堤文土器
90	SC6	蓋・底部	内：ヘラケズリ?	暗褐色・薄褐色	90と同じ		尖底形土器
91	SC6	蓋・口縁部	内：ナデのちユビオサエ 外：ナデ	赤褐色・赤褐色	角閃石・石英・白色粒子が多く、長石・ 1mmほどの褐色も少量含む。		85と同一個体タ。
92	SC6	蓋・?・底部	内：ユビオサエのちナデ 外：ナデ	薄灰色・褐色	2~3mmの灰色・赤色・白色等が多量に 入る。長石も目立つ。		弥生後期後葉～終末
93	SC6	蓋・口縁部	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	薄褐色・薄褐色	1~2mmほどの褐色・白色粒子を多く含む。 表面はわざか。		弥生後期後葉～終末
94	SC7	蓋	内：ナデ 外：範方向のハケ目	暗褐色・薄褐色	長石・赤色粒子・2mm前後の褐色が多い。 白色粒子も少量含む。		弥生後期後葉～終末 北部平野部型
95	SC7	蓋	内：ナデ 外：範方向のハケ目	暗褐色・暗褐色	長石・褐色粒子・2mm前後の褐色が多い。 白色粒子も少量含む。		弥生後期後葉～終末 北部平野部型
96	SC7	蓋・口縁部	内：ナデ 外：様方のハケ目	薄褐色・薄褐色	白色粒子が多く、長石・白色粒子も含む。 表面はわざか。		
97	SC7	蓋・口縁部	内：ナデ 外：様方のハケ目	褐色・褐色	石英・長石が多く、1~2mmほどの白色 粒子も目立つ。		
98	SC7	蓋・口縁部	内：ナデ 外：ナデのちユビオサエ	薄褐色・薄褐色	灰色粒子が多く、2~3mmの褐色も含む。 表面はわざか。		
99	SC7	鉢・口縁部	内：ナデ 外：ナデ	暗褐色・暗褐色	長石・1~2mmの褐色が多い。黑色粒子も 目立つ。表面はわざか。		

第4表 遺構出土遺物観察表（4）

No.	遺構	器種・部位	調 整	色 調	胎 土	備 考
				内面・外面		
100	SC12	甕・口縁部	内：ナデ 外：ナデ	暗褐色・褐色	2~3mmの礫が多い。黒色粒子も目立つ。	
101	SC12	甕・口縁部	内：ナデ 外：横方向のハケ目	薄褐色・薄褐色	石英・長石・灰色・赤色粒子を多く含み、角閃石・白色粒子も少量含む。	
102	SC12	甕・口縁部	内：ユビオサエのちナデ 外：横方向のハケ目	薄褐色・薄褐色	灰色粒子が多く、角閃石・石英・長石 赤色粒子が少量入る。	
103	SC12	甕・底部	内：ナデ 外：竈方向のハケ目	薄黄褐色・薄黃褐色	白色粒子が多く、長石・赤色粒子も含む。	弥生後期後葉～終末
104	SC12	甕・底部	内：ナデ ユビオサエ 外：竈方向のハケ目	灰白色・薄黃褐色	黑色粒子が多く、長石・白色粒子・2mm ほどの礫も目立つ。	弥生後期後葉～終末
105	SC12	甕・底部	内：ヘラケズリ 外：竈方向のハケ目	暗褐色・褐色	1~2mmほどの礫が多く、石英・長石 白色粒子も少量入る。	弥生後期後葉～終末
106	SC13	甕・口縁部	内：ナデ 外：斜め方向のハケ目	褐色・薄褐色	灰色粒子・1mmほどの礫が多い。 長石が少量入る。	
107	SC13	甕・口縁部	内：ナデ 外：斜め方向のハケ目	暗褐色・薄褐色	黑色粒子を含み、長石・灰色・白色粒子 を少量含む。	
108	SC3	管玉		濃水色		ガラス製
109	SA4	管玉		濃水色		ガラス製
110	SA12	管玉		薄緑白色		緑色凝灰岩
111	SA2	鉄器				刀子の柄か
112	SA2	鉄器				刀子の柄か
113	SA9	鉄器				?
114	SA7	鉄器				鉄

第5表 繩文土器観察表（1）

No.	遺構	部種・部位	調 整	色 調 内面・外面	胎 土		備 考
					胎	土	
1 SA2	深鉢・口縁部	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ		暗褐色・暗黃褐色	角閃石・石英・白色粒子が多く、長石も含む。		
2 SA2	深鉢・口縁部	内：横方向のミガキ？ 外：横方向のミガキ		薄赤褐色・黒色	角閃石・石英が多く、長石・白色粒子も少量含む。		外側は黒色磨研
3 SA2	深鉢・口縁部	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ		褐色・暗褐色	角閃石・石英が多く、長石・白色粒子も含む。		
4 SA2	深鉢・口縁部	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ		褐色・暗黃褐色	角閃石・石英・黑色粒子・白色粒子を含み、褐色粒子も少量含む。		
5 SA3	深鉢・口縁部	内：横方向のヘラケズリ 外：ヨコナデ		暗褐色・薄褐色	石英・角閃石・褐色・黑色粒子を含む。		
6 SA3	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ナデ		薄茶褐色・薄茶褐色	角閃石がおおく、石英・白色褐色粒子も含む。		
7 SA7	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ナデ		暗褐色・薄褐色	石英・角閃石が多く、長石・褐色粒子も含む。		
8 SA7	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ヨコナデ		褐褐色・褐褐色	角閃石・石英・褐色粒子も含む。		
9 SA7	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ナデ		褐色・暗褐色	角閃石・石英が多く、長石・褐色粒子も目立つ。		
10 SA7	深鉢・口縁部	内：ミガキ 外：ヨコナデ		黒褐色・薄茶褐色	白色・褐色粒子が多く、長石もやや入る。角閃石・石英も少量含む。		内面は黒色磨研
11 SA9	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ナデ		暗茶褐色・暗茶褐色	白色・褐色粒子が多く、長石も目立つ。角閃石・石英は少量含む。		
12 SA9	深鉢・口縁部	内：剥離が激しく、不明。 外：上向。		薄褐色・薄褐色	石英が多く、角閃石・長石も目立つ。白色・灰色粒子を少量含む。		
13 SA10	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ヨコナデ		薄茶褐色・薄茶褐色	角閃石・石英が多く、白色・褐色粒子も少量含む。		
14 SC3	深鉢・口縁部	内：剥離が激しく、不明。 外：上向。		薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英が多く、長石も目立つ。白色・褐色粒子も含む。		
15 SC7	深鉢・口縁部	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ		暗褐色・暗褐色	角閃石・石英・白色粒子を含む。長石も少量含む。		
16 SC7	深鉢・口縁部	内：横方向のヘラケズリ 外：ヨコナデ		暗茶褐色・暗褐色	角閃石・石英・白色粒子が多い。長石・褐色粒子も少量含む。		
17 SC7	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ナデ		薄茶褐色・薄茶褐色	角閃石がおおく、石英・長石も目立つ。褐色・白色粒子も多い。		
18 SX6	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：条痕のち剥りけし		薄赤褐色・薄茶褐色	角閃石・長石・石英が多く、褐色・白色粒子を含む。		
19 SA2	深鉢・口縁部	内：ヨコナデ 外：ナデ		褐色・黒褐色	角閃石・石英が多く、褐色粒子も含む。1mmほどの砂も目立つ。		
20 SA2	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：剥離が激しく、不明。		薄茶褐色・薄赤褐色	石英・白色・褐色粒子が多い。角閃石は少量。		
21 SA4	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ヨコナデ		薄赤褐色・薄褐色	角閃石・石英が多く、長石も目立つ。白色・褐色粒子も含む。		
22 SC4	深鉢・口縁部	内：剥離ケズリ 外：剥離ケズリ		薄褐色・薄茶褐色	角閃石・石英が多く、褐色粒子も目立つ。		
23 SX4	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ナデ		薄茶褐色・薄褐色	石英・角閃石・長石・白色粒子を含む。		
24 SA2	深鉢・口縁部	内：条痕のち剥りけし 外：ヨコナデ		暗赤褐色・薄茶褐色	角閃石・石英・白色粒子が多い。長石も少量含む。		尖端の下に径5mmほどの穿孔穴あり。
25 SA8	深鉢・口縁部	内：剥離が激しく、不明。 外：ナデ		薄赤褐色・暗褐色	角閃石・石英・透明光沢粒子が多い。白色粒子も目立つ。長石はわずか。		
26 SA8	深鉢・口縁部	内：剥離が激しく、不明。 外：ナデ		薄茶褐色・薄茶褐色	角閃石・石英が多く、白色粒子も目立つ。長石はわずか。		
27 SA9	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ヨコナデ		褐色・薄茶褐色	石英・角閃石・白色・褐色粒子を含む。		
28 SA9	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ナデ		黒褐色・黒褐色	褐色粒子が多く、角閃石も目立つ。長石も含む。石英はわずか。		
29 SA12	深鉢・口縁部	内：剥離が激しく、不明。 外：横方向のミガキ？		茶褐色・暗褐色	角閃石・石英・褐色粒子が多く、褐色粒子も目立つ。長石も少量含む。		外側は黒色磨研？
30 SA12	深鉢・口縁部	内：ナデ ユビオサエ 外：ナデ		黒褐色・薄茶褐色	角閃石・石英が多く、褐色粒子も目立つ。石英は少量。		
31 SC4	深鉢・口縁部	内：ナデと一部ケズリ 外：上向。		赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英が多く、褐色粒子も目立つ。長石も少量含む。		
32 SC7	深鉢・口縁部	内：ナデ 外：ナデ		橙色・明褐色	石英が多く、角閃石・白色・褐色粒子も少量含む。		
33 SC7	深鉢・口縁部	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ		薄褐色・暗褐色	石英が多く、角閃石・白色・褐色粒子も少量含む。		
34 SX4	深鉢・口縁部	内：柔軟のちナデ消し？ 外：ナデと一部ケズリ		茶褐色・薄茶褐色	角閃石・褐色粒子が多く、石英も目立つ。長石・褐色粒子も少量含む。		
35 SX4	深鉢・口縁部	両面ともに剥離が激しく、不明。		薄褐色・褐色	石英が多く、白色粒子も目立つ。長石・角閃石も少量含む。		

第6表 繩文土器観察表 (2)

No.	遺構	器種・部位	調 整	色 調	胎 土	備 考
				内面・外面		
36	SI5	深鉢・口縁部	内:ナデ 外:痕痕のち拂り消し?	茶褐色・茶褐色	褐色粒子が多く、角閃石・石英・長石も含む。	
37	SA3	深鉢・口縁部	内:ナデ 外:ナデ	茶褐色・茶褐色	角閃石・褐色粒子がおく、長石・石英も含む。	
38	SC6	深鉢・口縁部	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	薄黄褐色・薄黄褐色	角閃石・石英が多く、白色粒子も目立つ。 長石は少量。	美術下に僅1cmほど の貫通穴をもつ。
39	SA2	深鉢・口縁部	内:横方向のハケ目 外:ナデ	薄黄褐色・黒褐色	角閃石が多く、石英・黑色・白色粒子も含む。	
40	SA3	深鉢・口縁部	内:横方向の条板 外:突帯より上はナデ 下は横方向の条痕	赤褐色・赤褐色	角閃石・石英が多く、長石・白色粒子も含む。	
41	SA4	深鉢・口縁部	内:ナデ 外:ナデ	薄褐色・薄褐色	石英がおおく、角閃石・長石・褐色粒子も少々含む。	
42	SA12	深鉢・口縁部	内:ヨコナデ 外:ヨコナデ	褐色・薄褐色	褐色・褐色粒子が多く、石英・長石も少々含む。	
43	Sx6	深鉢・口縁部	内:ナデ ユビロサエ 外:開口	褐色・赤褐色	石英・角閃石・白色粒子を多く含み、 長石もわずかに含む。	
44	SA4	深鉢・口縁部	内:剥離が激しく、不明。 外:ナデ	薄褐色・薄褐色	石英が多く、角閃石・褐色粒子も少量含む。	口唇部・突審部に 円形の刺突を もつ。
45	SA2	深鉢・口縁部	内:横方向のケスリ 外:ナデ	黒褐色・黒色	角閃石・白色粒子が多く、石英・長石も少々含む。	
46	SA4	深鉢・副部	内:ミガキ 外:編み出しによる格子文	薄赤褐色・薄赤褐色	白色粒子が多く、角閃石・石英も少量含む。	
47	SA4	深鉢・副部	内:ケスリ? 外:編み出しによる格子文	薄茶褐色・薄赤褐色	角閃石・長石が多く、白色粒子も含む。	
48	SA12	深鉢・口縁部	内:ミガキ 外:ミガキ	薄茶褐色・薄茶褐色	角閃石を多く含み、石英・白色粒子も含む。	
49	SA2	深鉢・口縁部	内:ナデ 外:ヨコナデ	薄褐色・薄褐色	石英・褐色粒子を多く含む。	
50	SA9	深鉢・口縁部	内:ナデ 外:ミガキ	暗赤褐色・暗茶褐色	石英・黑色粒子が多く、角閃石・白色粒子も少量含む。	口縁内部に沈締 をもつ。
51	SA12	深鉢・口縁部	内:ミガキ 外:ミガキ	薄褐色・薄褐色	黑色粒子を多く含み、角閃石・石英を少々含む。	
52	SA12	深鉢・口縁部	内:ナデ 外:ミガキ	赤褐色・薄茶褐色	白色粒子がおおく、石英を少量含む。	口縁内部に沈締 をもつ。
53	SA2	深鉢・口縁部	内:ミガキ? 外:ミガキ	茶褐色・薄茶褐色	石英・長石を少量含む。1mmほどの擦 含む。	口縁内部に沈締 をもつ。
54	SA2	深鉢・口縁部	内:丁寧なミガキ 外:丁寧なミガキ	赤褐色・赤褐色	白色粒子を含む。	
55	SX3	深鉢・口縁部	内:丁寧なミガキ 外:ミガキ	黑色・暗赤褐色	石英・白色粒子が多い。	内面は黑色磨研。
56	SA4	深鉢・口縁部	内:ミガキ 外:ミガキ	黑褐色・黒褐色	白色粒子・石英を含む。	両面とも黒色磨研?
57	SC6	深鉢・口縁部	内:ミガキ 外:ミガキ	黒褐色・薄灰褐色	白色・褐色粒子を多く含み、石英も少々含む。	内面は黑色磨研。
58	SX6	深鉢・口縁部	内:ミガキ? 外:ミガキ	黒褐色・薄茶褐色	褐色・褐色粒子を多く含む。	両面とも黑色磨研。
59	SX8	深鉢・口縁部	内:ナデ? 外:粗いミガキ	薄茶褐色・茶褐色	角閃石・石英・長石・褐色粒子を多量に含む。2mm前後の擦も目立つ。	
60	SA3	深鉢・底部	内:ナデ 外:ナデ	薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英を多く含み、白色粒子・長石も少々含む。	
61	SA3	深鉢・底部	内:ナデ 外:ナデ	薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英・灰色粒子が多く、長石	
62	SA4	深鉢・底部	内:ナデ 外:ナデ	薄赤褐色・薄赤褐色	角閃石・石英が多く、長石・褐色粒子も含む。	
63	SA4	深鉢・底部	内:粗いケスリ 外:粗いケズリ	薄黃褐色・薄赤褐色	角閃石・石英が多く、褐色粒子を多く含む。 2mmほどの擦も含む。	
64	SA3	?・底座	内:ナデ 外:ナデ	薄黃褐色・薄褐色	石英・角閃石・褐色粒子が多く、長石・ 白色粒子も目立つ。	
65	SA3	浅鉢・底座	内:剥離が激しく、不明。 外:ナデ	薄茶褐色・薄茶褐色	角閃石が多く、石英・黑色・白色粒子も少々含む。	上げ底きみ。
66	SC7	深鉢・底部	内:ナデ 外:ナデ	薄茶褐色・茶褐色	石英・角閃石・長石・褐色粒子を含む。	

第7表 石器観察表

No.	遺構	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	石 材	備考
1	SA2	打削石鏽	1.2	1.2	0.3	0.4	チャート	先端が欠損。
2	SA5	打削石鏽	2.4	1.4	0.3	1.1	チャート	が欠損。
3	SA12	打削石鏽	2.6	1.2	0.3	1.8	チャート	
4	SA8	磨削石鏽	3.7	1.1	0.25	1.3	片岩	先端が欠損。
5	SA3	尖頭状石器	2.4	2.2	0.45	3	チャート	
6	SA2	尖頭状石器	4.6	3	0.9	14.2	チャート	
7	SA2	石核	7.6	4	3	133.5	チャート	
8	SA9	擦石	5.15	4.9	2.9	122.3	波紋岩質 火成岩	中央部に径2mm ほどの穴あり。
9	SC6	敲石	5.2	4.85	4.9	196	チャート	
10	SA2	敲石	4.15	3.95	3.65	90.9	チャート	
11	SA2	擦石	11.45	9.5	11.45	1.76kg	砂岩	
12	SA7	スクレイパー	5.5	4.05	0.4	18.8	片岩	
13	SX1	偏平形打製 石器	13.3	4.4	1.35	113.6	頁岩	
14	SA3	偏平形打製 石器	6.7	4.6	1.45	55.5	片岩	
15	SA10	石匙	7.7	4.2	0.8	29.9	頁岩	
16	SA4	偏平形打製 石器	13.1	8.4	1	158.7	千枚岩	
17	SA7	砥石	8.5	2.4	1.1	50	砂岩	
18	SA4	砥石	7.5	2.95	0.65	35.6	砂岩	
19	SA4	砥石	10.3	6	2.3	185.2	砂岩	
20	SA3	砥石	12.3	9.4	1.5	334	砂岩	
21	SA12	打削石斧	9.6	3.9	1.15	62.6	頁岩	
22	SA8	打削石斧	9.6	4.2	1.2	63.2	頁岩	
23	SA9	打削石斧	10.9	4.7	0.65	63.5	緑色凝灰岩	
24	SA5	打削石斧	10.6	4.8	1.9	139.2	緑色凝灰岩	
25	SA2	打削石斧	10.4	4.8	1.85	120.6	緑色凝灰岩	
26	SX15	打削石斧	13.1	4.95	1.85	146.9	凝灰岩	
27	SA2	廢斬石斧	6.8	3.35	1.25	49.6	砂岩	
28	SA4	廢斬石斧	6.3	5.1	3.4	297	砂岩	
29	SA2	廢斬石斧	6.95	6.9	3.7	184.7	砂岩	
A	SA3	黒曜石片				6.5	謙岳産(佐賀県)	
B	SA3	黒曜石片				2.1	謙岳産(佐賀県)	
C	SA4	黒曜石片				4.1	謙岳産(佐賀県)	
D	SC7	黒曜石片				3.6	謙岳産(佐賀県)	

## 第4章　まとめ

最後に平底遺跡の遺構年代等について述べて、終わりとしたい。

### [縄文時代晚期]

出土遺物は少ないが、SA5・SA6・SC2が該当する。いずれも縄文時代晩期の深鉢・浅鉢の口縁部や底部の破片のみであり、完形に近いものは出土しなかった。遺構に関してはSA5が方形の堅穴式住居跡であり、平成3年度調査の田向遺跡で確認された縄文時代晩期の堅穴住居跡が、この時期の堅穴住居跡のようにほとんど円形であることを考えると、いささか異なった状況であると言える<sup>2</sup>。ただ、この地域は発掘調査事例自体が少ないため、現状では詳しいことは分からぬ。今後の調査成果を待ちたい。

なお、縄文時代晩期以前の検出面であるアカホヤ火山灰層の下層からは、縄文時代早期および旧石器時代の遺構・遺物は全く確認できなかった。

### [弥生時代後期]

SA3・SC6・SC7・SC12・SC13が該当する。特にSC6・SC7は出土遺物が比較的恵まれているので、両遺構を中心に述べていきたい。

まず、SC6からは、89に見られる工字突帯文土器が出土していることが注目される(第37図)<sup>3</sup>。周知のように、この土器は大分県大野郡を流れる大野川の上・中流域にかけてよく見られる土器であり、宮崎県内でも高千穂町内の遺跡からの出土事例が確認されている<sup>4</sup>。今回出土したものは、大分県内の編年によれば弥生時代後期後葉～終末の範疇にはいるものと考えられ、共伴する91の壺形土器(口縁部)から考えても、問題ないと考えられる(第37図)。90はいわゆる「尖底土器」である。土器片の胎土・調整などが89に類似しており、89と同一個体かと考えられる。この手の土器は高千穂町・薄糸平遺跡でも1点確認されている<sup>5</sup>。

次にSC7であるが、ここからはSC6とは外観的に異なった土器類が出土している。94・95は外前にハケメ状の調整痕をもつ壺形土器である(第39図)。このタイプのものは延岡市などの北部平野部においてよく見られるもので、色調・胎土なども他の土器類とは全く異なる様相である<sup>6</sup>。形態的には頸部から口縁部にかけて「くの字」状に外反し、口唇部は平らに仕上げられている。底部は3cm前後の半底を残し、弥生時代終末ごろの様相を示している<sup>7</sup>。SC12・SC13も同様のハケメ調整痕をもつ壺形土器が出土しており、形態的にもSC7と同時期のものと考えてよいだろう(第41図)。

形態的に見ると、平底遺跡出土の弥生土器は宮崎平野部より大分地方および宮崎県北部平野部の様相を強く顯している。壺形土器のみを見れば、宮崎平野部の編年の範疇には入らず、古墳時代初頭ごろに組み込まれるべきものである<sup>8</sup>。ただ、SC6に見られるように、89(第37図)の工字突帯文土器が大分県大野地方で古墳時代まで下らず、また93(第37図)の壺形土器が宮崎平野部では弥生時代後期後葉～終末(石川編年のVI期)に位置付けられることなどから考えると、弥生時代後期後葉～終末ごろに比定すべきかと考える。近年、この周辺で調査された弥生時代後期の遺跡では、五ヶ村遺跡が挙げられる<sup>9</sup>。当該遺跡のSA5からは安国寺式土器・工字突帯文土器といった後期の東九州地域においてよく見られる土器類が出土している。また、壺形土器の底部片は全てわずかな「平底」を残すのみで、「丸底」になる前段階の様相を呈している。平底遺跡出土の弥生土器は、底部に限っては全て同様の形態であり、また工字突帯文土器を共伴すると

いう共通性を持っている。報告書中ではこれらの土器類から弥生時代後期中葉～後葉に位置付けられているが、平底遺跡は前述した共伴関係から、終末期まで下るものと考える。後述するSC5出土の土器類から考えても、SC6・SC7の出土土器を古墳時代まで降らせるることは難しいと考える。

SC6とSC7の先後関係について、出土土器の様相が異なるので少々言及したい。先述した五ヶ村遺跡の5号竪穴住居跡からは、安国寺式土器、工字突帯文土器、内面・外面にハケ目をもつ在地系の土器類が出土している。報告書中でも述べられているように、泥ざりこみの土器が多いため時代の確定は難しいが、ある程度の推定は可能と考えられる。まず安国寺式土器について見ると、これらは弥生時代後期中葉～後葉に位置付けられる。口縁部の長さを見る限り、終末まで降ることはないと考えられる。次に工字突帯文土器であるが、これは破片であるため特定は難しいが、突帯の线条が多条のものと一条のものが存在する。5号住居跡出土のそれは多条のものである。大野川流域の編年表に従えば、多条が後期中葉、一条が後期後葉ということになる。在地系は、基本的に口縁部がくの字状に外反するもので、口縁部外面の上部にわずかなくぼみをもつものと、もたないものの2タイプが存在する。この手の壺形土器に関しては、調査事例が少ないため断定はできないが、報告書中では後期後葉ころに推定されている。平底遺跡のSC6から出土した工字突帯文土器（第37図-89）は、大野川流域の編年および五ヶ村遺跡の土器類から見る限り、後期後葉の範疇に入るものの、共伴する壺形土器の破片（第37図-93）から、降っても終末までと考える。一方、SC7からは在地系の壺形土器、特にハケ目をもつ土器片を中心にしており、工字突帯文土器は1点も出土していない。もちろん遺跡内の遺構密度が低いため、土器の量自体が少ないのであろう事も考えられるが、SC6からハケ目をもつ土器類が全く見られないことも、偶然として片付けられるべき事象ではないと考える。なぜなら両遺構は隣接しており、時期的に重なるのであればかなりどちらか、あるいは両方の遺構から双方の土器類が出土するのが普通だと思えるからである。五ヶ村遺跡および中尾原遺跡（延岡市）の出土状況を見る限り、SC7は後期後葉を中心とした時代であり、SC6よりは少し古いのではないかと考える。

なお平底遺跡からは、熊本県免出町下乙木目遺跡を指標とする免田式土器や、安国寺式土器は全く出土していない。本遺跡の遺構密度によるものなのか、地域差によるもののかは分からぬ。ただ、両者とも宮崎平野部の編年のV～VI期に存在するものなので、今後の調査において留意すべきであろう。なお、安国寺式の複合口縁壺は、高千穂町・延岡市・東郷町などでは確認されており<sup>10</sup>、口之影町内でも布平遺跡で小片ではあるが、その出土事例が確認されている<sup>11</sup>。

### [古墳時代前期]

古墳時代前期に関しては、SC5からまとまった遺物が出土している（第34～35図）。出土遺物は壺形土器が中心になる。形態的には2タイプのものが存在する。

一つは76・80・83・84・85・86で、頭部から口縁部にかけてなだらかに「逆ノの字」状に外反するタイプのものである。76・86は底部が丸底になっている。厚さに関しては、76が比較的厚く、底部は2.0cm前後を測る。83・84・85・86は薄手のつくりで、全体的に剥離が進行している。色調も76が茶色系であるのに対して、赤色系統である。

もう一つは77・78で、頸部から口縁部にかけて長い「くの字」状に外反するタイプのもので、調整に関しては前者に比べて丁寧さが感じられる。この2点に関しては底部部分が出土していないため全体的なプロポーションは分からぬが、当遺構からは平底形の土器片が出土しておらず、77・78も丸底形の壺形土器であると推定される。

他の器種では81・82の鉢形土器（第34図）、83の壺形土器が共伴して出土している（第35図）。83は短剣壺のたぐいであり、胴部はかなりふくらんだ形になると考えられる。調整もヘラケズリを中心にはどこしておらず、古墳時代前期の特徴を表している。ただ前述のように、壺形土器に関しては庄内・布留形式に見られるような口縁部が「くの字」に外反し、胴部が頸著にふくらん

だ形態のものは皆無である。しかし、底部が丸底であること、口縁部と胴部の径がほぼ同じであること等を考え合わせるならば、古墳時代初頭～前期初前葉ごろに推定したい。

なお、本遺構からも安国寺式土器は出土していない。

### [古墳時代中期]

この時期は、須恵器が出上している遺構を中心に述べていく。該当する遺構は、SA2・SA4・SA9である。なお、須恵器に関しては愛媛大学・埋蔵文化財資料室の三吉秀光氏に出土品をみていただき、ご教示を賜った。以下、年代・産地等については三吉氏のご教示に従い述べていくことを断っておく。

SA2は前述したように西白杵郡内では最大規模の竪穴住居跡であり、当初は試掘結果および現存深度から弥生時代後期後葉から古墳時代初頭までの時期が考えられた。しかし、本遺構からは須恵器の高坏の端部と考えられる破片が1点出土した（第9図-6）。また、SA4からも同様の遺物が1点出土している（第11図-28）。

SA9からは須恵器高坏脚部1点、坏身2点が出土している（第19図）。三吉氏によると、SA9-58の高坏は形態・自然釉のかかり具合から、ほぼ間違いない松山市周辺で焼成されたものであり、時期的には5世紀中頃のもので、陶邑古窯跡群のTK208併行期の所産である<sup>12</sup>。形態的には端部のすぐ上に三角状突帯をもち、断面は四角形を呈し、接地面を内側にもっている。陶邑編年表にあてはめれば、I形式-2段階あたりであり、当時期に該当すると考えてよいと思う。また、前述した6および28も高坏であれば同時期の所産であり、形態的にも松山産の須恵器である可能性を含んでいる。

56・57の坏身は口縁部が比較的長く、顯著に外反する。56に比べると57のほうが返りの端部が薄いくらいになっている。2点とも現状の限りではほとんど全く自然釉がかかっていない。56の復元口径は13.4cm、57のそれは12.4cmである。この2点は時期的には58の高坏よりは降るが、陶邑編年のI形式-3段階ごろに相当すると考えられる。

土師器に関しては、壺形土器および坏あるいは鉢形土器などの破片のみが出上している。

壺形土器は、SA4（第11図）およびSA9（第19図）から出土している。SA9出土のものは少々形態的な相違が認められるが、SA4出土のものはほとんどが、口縁部が直線的のび、断面は四角形である。つくりも全体的に厚く、調整もほとんどナダのみであり単純である。胎土も角閃石などのガラス系鉱物を多量に含み、間違いなく在地系の土師器と考えられる。なお、西白杵郡周辺で調査された古墳時代の遺構としては、平成6年度調査の広木野遺跡（五ヶ瀬町内・宮崎県文化課調査）があげられる<sup>13</sup>。当該遺跡からは6世紀後半代の須恵器およびそれに伴うと考えられる土師器も出土している。平底遺跡出土の上師器壺と広木野遺跡のそれを単純に比較するならば、明らかに平底遺跡出土のものは6世紀後半代のものではなく、どちらかと言えば古墳時代前期のそれに近い形態である。そしてSC5（古墳時代前期初頭）およびSC6・SC7（弥生時代後期終末）の壺形土器とも異なった形態であり、SC5からは同タイプの壺形土器は一点も確認されていない。この点に関しては少々煩雑ながら、これまでの諸先駆の業績を鑑みながら述べていきたい。

宮崎県内の土師器編年に関しては、松永幸寿・今塩谷穀行両氏の研究が挙げられるので、そちらを中心にして考えていきたい<sup>14</sup>。松永氏によると、宮崎平野部で初期須恵器が登場するのは布留4期であるとされる（松永氏論文の9期～後1期）。今回、平底遺跡のSA9から出土した初期須恵器（第19図-56～58）と共に伴うと考えられる土師器は、この時期の形態とは異なった様相を示し、編年表で見ればむしろそれより前段階の8・9期のそれに類似した形態を呈している。なお、指標土器としては、8期を上齒遺跡F地区SA10<sup>15</sup>、9期を八幡上遺跡SA1<sup>16</sup>にそれぞれ比定されている。上齒遺跡F地区は古墳時代中期後半から後期までの遺跡であり、報告書中ではそれぞれの土師器は五段階に形式分類されている（I～V期）。SA10はI期にあたり、次のII期になり初めて初期須恵器が出現する。このII期にあたるSA5出土の土師器に関しては、報告書中でも

触れられているようにⅠ期の土師器とはその形態に大きな変化が見られる。壺形土器だけを見れば、その口縁部は明らかに緩やかではあるが外反し、古墳時代後期のそれに近い感じを受ける。松永氏論文では、このSA5出土の土師器を9期～後1期に分類し、この時期をもって初期須恵器の出現時とされる。この他で同時期と思われる土器類が出土している遺跡としては、枯木ヶ迫遺跡がある<sup>17</sup>。当該遺跡のSA2・SA3・SA4・SA12出土の壺形土器は、形態的に上巣遺跡F地区SA10と同形態のもので、同遺跡SA1・SA5が上巣遺跡F地区SA5段階に相当する。枯木ヶ迫遺跡では、この段階になり須恵器が出現する。少なくとも宮崎平野部では、直線状の口縁をもつ壺形土器の段階では須恵器は共伴せず、その次段階、つまり口縁が緩やかに外反する形態の壺形土器とともに初期須恵器が現れることが分かる。また、他地域の事例としては、宮崎県北部で唯一この時期の遺跡が確認されている中野内遺跡（東臼杵郡北浦町）が挙げられる<sup>18</sup>。当該遺跡のSA10・SA13・14・18から出土している須恵器は、報告書中でおおむねTK23からTK47（I段階～4・5段階）の時期に相当するとされている。また、共伴する土師器類も宮崎平野部出土のものと同形態であり、ほぼ同様の時代変遷をたどっている可能性もある<sup>19</sup>。

以上の事実を踏まえた上で、平底遺跡出土の土師器の年代を考えてみたい。

まず、SA4出土の壺形土器（口縁部）は、頸部から口縁部にかけて直線状にのびる形態のもので、宮崎平野部で初期須恵器と共伴する土師器とは明らかに異なる様相を示している。これに対し、SA9出土の壺形土器はわずかではあるが全体的に外反する性質をもち、調整もSA4のものに比べ、ケズリ・ミガキをほどこすものも見られる（第19図-41・45）。そして共伴する須恵器の年代等を考え合わせるならば、少なくともSA4・SA9から出土した土師器は、Ⅰ形式-2～3段階に併行するもので、宮崎平野部の編年では松永氏論文の8～9期に相当する。西臼杵郡周辺では調査事例が少ないこともあるが、編年自体が異なる可能性がある。今現在の状況のみで考えるならば、西臼杵郡周辺の古墳時代中期前後の土師器は宮崎平野部に比べて、古い形態のものを長い期間使用していたことになる。それは宮崎平野部で初期須恵器と共伴する土師器がいまだにこの地域では見られず、前時期の土師器が初期須恵器と共伴しているからである。そして、この傾向が当地域でいつごろまで続くのかは分からぬ。

壺・鉢などの小型器種は宮崎平野部と同形態のものが出土している。ただ、SA4とSA9では若干の相違が認められる<sup>20</sup>。SA4出土の19～24（第11図）は口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がるるものと口縁部が少々外反するもののが認められる（第11図）。胎土は角閃石などを多く含み、調整もナデが主体となる。これに対しSA9は、49～53（第19図）全ての口縁部が顕著に外反する。もちろん小破片であるから、現状のみで断定することはできないが、SA4とSA9でこれだけ顕著な相違が存在することは参考にしてよいと思う。胎土はSA4のものに比べると角閃石がほとんどなく、その代わり赤・橙色の微粒子が多く含まれる。調整も両面、特に内面にヘラケズリがほどこされている点が特徴である。

その他の土師器では、SA2から小型の鉢形土器（第9図-3）、台付鉢の台座部分（第9図-5）、SA10からはSA4・SA9と同型の壺形土器の口縁部が出土している（第23図-59・60）。

以上から、古墳時代と考えられる遺構の年代を推定すると、SA2・SA4を5世紀前半～中頃、SA9を5世紀中頃前後に比定できると思う。また、SA2の最下層から出土したドングリの炭化物の放射性炭素年代測定値は $1730 \pm 40$ 年であり、西暦250～380年という結果を得た。出土した須恵器の時期と比べると下限の380年から20年以上のズレが生じるが、現段階では須恵器の年代から推定するにとどめる。

なお、側溝形遺構としたSX1～SX8については、第3章第2節において記したとおりである。はたしてこれらの遺構が人為的に造成されたものか、あるいは畑地造成時の掘削により、周りより深く削られた部分に水分・鉄分等が沈殿して現状のような状態に落ち着いたかは分からぬ。ただ、ほとんどのものが堅穴住居跡（SA）のそばに位置しており、後者として考へるには偶然すぎるという感もある。埋土分析の結果、当初予想した「トイレ遺構」ではないことは、ほぼ間違いないと考えられる。この点に関しては、以後の調査事例を待ちたいと思う。

## ※ 脚注

- 1 石器については、小野信彦・赤崎広志・藤木聰謙氏より多大なるご教示をいただいた。
- 2 田向遺跡『田向遺跡・平谷遺跡』 宮崎県教育委員会 1994年。
- 3 「田向遺跡・平谷遺跡」 宮崎県教育委員会 1994年。
- 4 「薄糸平遺跡」 日本鉄道建設公団下関支社・高千穂町教育委員会 1978年。
- 5 4と同じ。
- 6 松林氏のご教示による。
- 7 中尾原遺跡『上方南地区発掘調査概報』 延岡市教育委員会 1991年。
- 8 石川悦雄「宮崎県における弥生土器編年私案」『宮崎県総合博物館研究紀要 8』宮崎県立総合博物館 1983年。
- 9 五ヶ村遺跡『五ヶ村遺跡 大野原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2003年。
- 10 7に同じ。『ハッ山遺跡』東郷町教育委員会 2003年。  
『岩戸五ヶ村遺跡』高千穂町教育委員会 2000年。
- 11 布平遺跡『布平遺跡・古城遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2003年。
- 12 二吉秀充「陶質土器の受容と初期須恵器の生産—古墳時代・愛媛の一側面—」第2回 愛媛大学考古学研究室公開シンポジウム 2002年。
- 13 広木野遺跡『広木野遺跡・神殿遺跡A地区』宮崎県埋蔵文化財センター 1997年。  
広木野遺跡は6世紀後半の遺跡であり、平底遺跡とは1世紀前後の年代差がある。土師器、特に壺形土器に関しては、五ヶ瀬川上・中流域で編年自体が異なるのか、あるいは5世紀後半～6世紀後半の間にこの地域でもほぼ同様の土器様式に落ち着いたのかが、以後の問題点であると思う。
- 14 松永幸寿「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古 17』宮崎県考古学会 2001年。
- 15 『上園遺跡F地区』新富町教育委員会 1995年。
- 16 八幡上遺跡『銀代ヶ迫・八幡上遺跡』新富町教育委員会 1992年。
- 17 『枯木ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 2002年。
- 18 『中野内遺跡』北浦町教育委員会 1997年。
- 19 今塙屋毅行・松永幸寿「日向における古墳時代中～後期の土師器 一宮崎平野部を中心にしてー」第5回 九州前方後円墳研究会 古墳時代中・後期の土師器（於佐賀大学全学教育センター大講義室）2002年。  
なお、この点に関しては議論の余地がある。中野内遺跡出土の土師器は報告書中でも言われているように、共伴する須恵器がI形式-4～5段階に位置付けられ、必ずしもその前段階の土師器が宮崎平野部の編年に即応するわけではない。平底遺跡出土の須恵器は全てI形式-1～2段階に位置付けられるもので、この段階における中野内遺跡の土師器も平底遺跡と同様の形態である可能性もある。ただ、この地域は出土事例が少ないので推測することすら難しい。以後、延岡市もふくめた東臼杵郡一帯の調査事例に注意する必要がある。
- 20 この点に関しては、今塙屋氏（宮崎県埋蔵文化財センター）から多くのご教示をいただいた。以下は今塙屋氏による所論であり、客観的に考えても十分首肯し得る推測だと考えられる。SA4・SA9から出土した小型器種の破片は、同時期に使用されるるものであり、特に大幅な時期差はないとのことであった。現状を見る限り、平底遺跡出土の古墳時代中期の土器類は、壺形土器はいまだ古墳時代前期に近い旧式のものを使用し、逆に小型の壺・鉢などは宮崎平野部とほぼ同様のものを使用している。このような状況から、少なくともこの地域が宮崎平野部あるいは他地域と交流があったにもかかわらず、器種の取扱選択を意識的に行っていったことが推測できる。

## おわりに

以上、煩雑ながら平底遺跡の時代設定を試みた。現状で分かる限りでは、縄文時代晚期・弥生時代後期終末・古墳時代前期・古墳時代中期の遺構および遺物が確認できたと思う。特にSA9出土の須恵器に関しては、少なくとも5世紀中頃の段階では松山産の須恵器が海を渡ってこの地域にも搬入されており、日之影地域と松山の間で交流があった可能性がある。

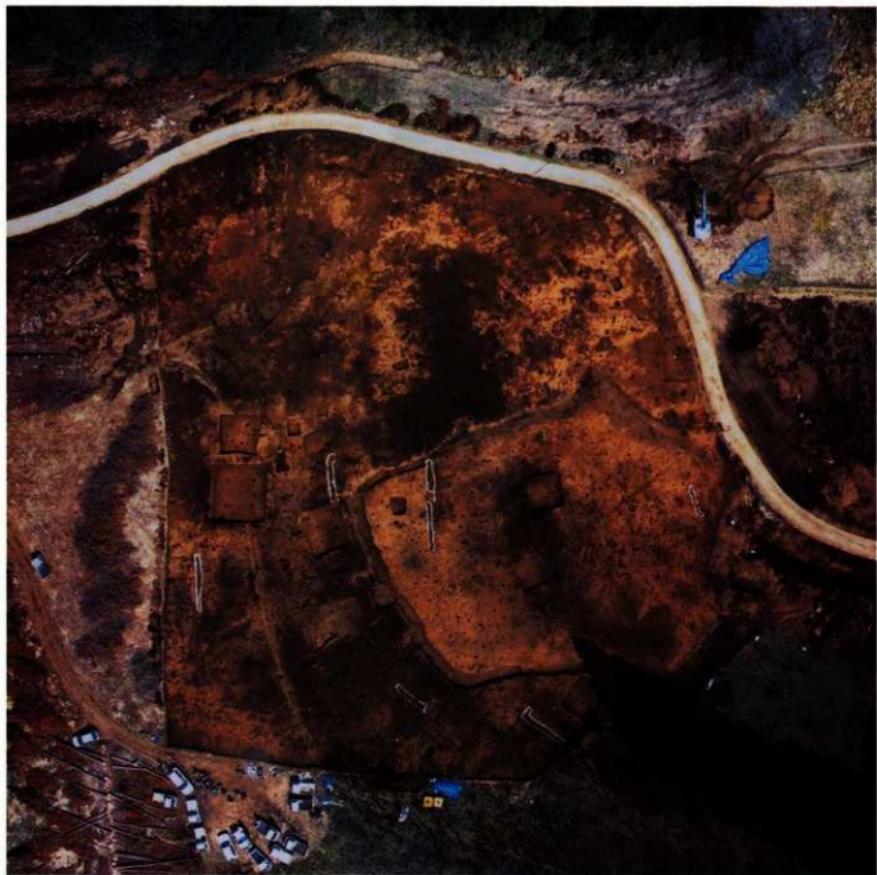
土師器に関しては、いまだ当地域の発掘調査事例が少ないため明確な土器の年代設定を行うことはできない。しかし、共伴する須恵器の年代が確定なものに関しては、ある程度の推定を行うことは可能と考える。今後の調査事例を待ちたいと思う。

最後になりましたが、今回の調査および報告書作成にあたって多大なるご助力をいただいた方々に、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

石川悦雄（宮崎県教育庁文化課係長） 松林豊樹（宮崎県教育庁文化課） 谷口武範  
竹井眞知子 赤崎広志 藤木 晃 今塙周毅行（以上、宮崎県埋蔵文化財センター。なお、  
竹井氏は平成14年度をもってご勇退。）

山田 晃（延岡市福祉課） 高浦 哲 尾方農一（以上、延岡市文化課）  
小野信彦（北方町社会教育課文化財係長） 諸方俊輔（高千穂町社会教育課文化財係主事）  
三吉秀充（愛媛大学法文学部埋蔵文化財調査室）

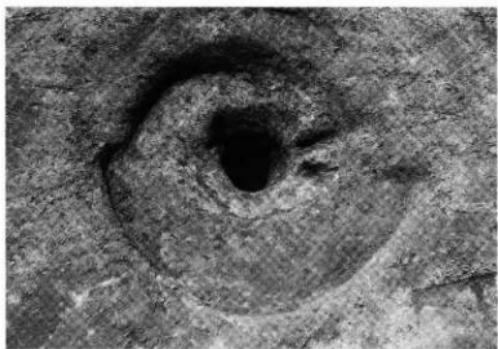
（順不同 敬称略）



遺跡全体図



SA2



SA2炉跡



SA3



SA4



SA5



SA9



SX1



SX2



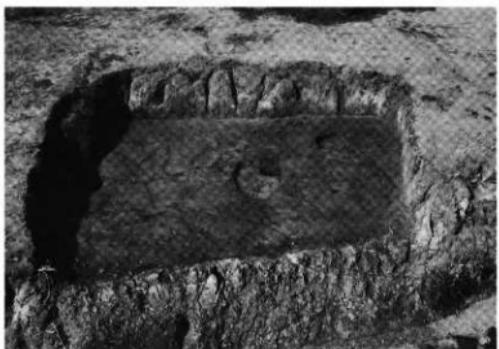
SX4



SX5



SX6



SC3



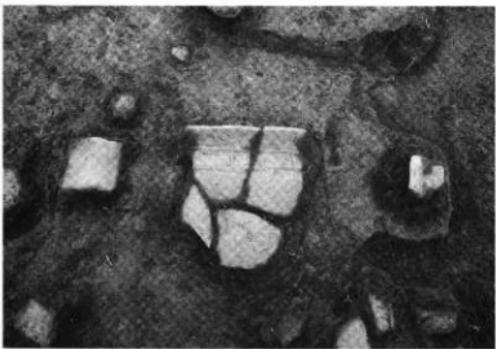
SC4



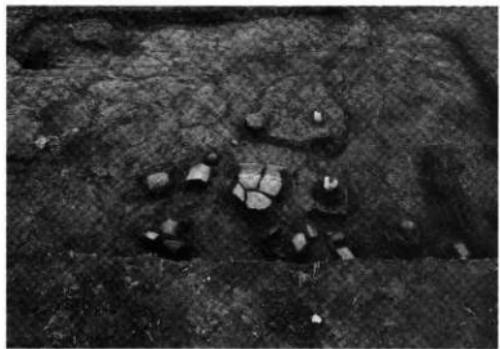
SC5 (北から)



SC5 (南から)



SC6 (北から)



SC6 (北から)



SC6 (南から)



SC7 (土器出土状況)



SC7 (土器出土状況)



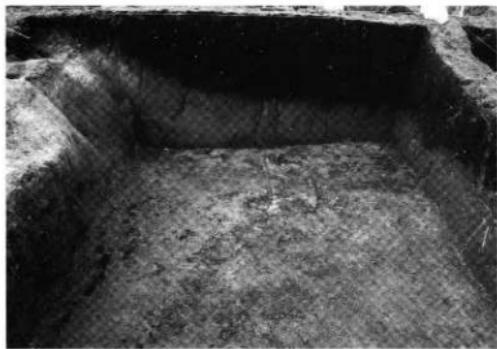
SC7 (南から)



SA3土層（南から）



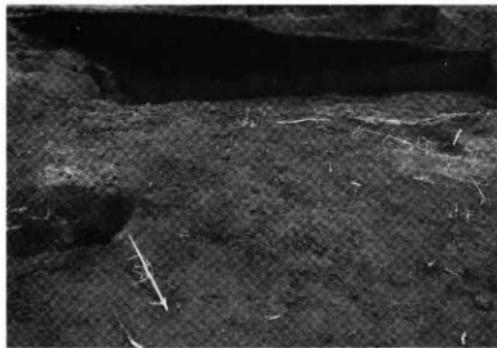
SA9土層（西から）



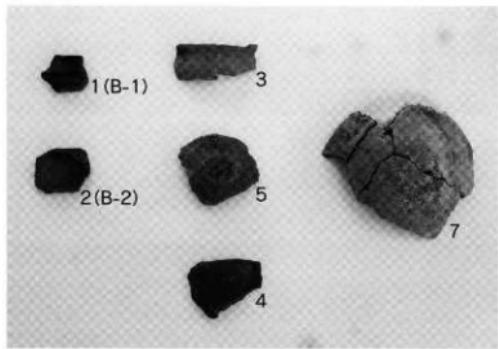
SA10土層（南から）



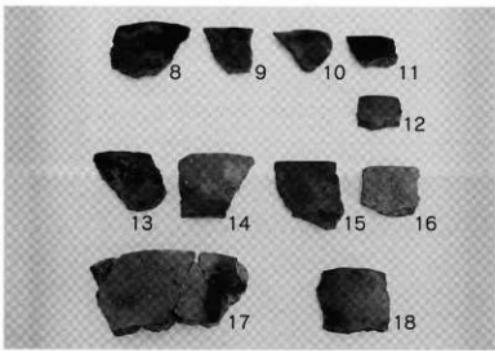
SA10土層（南から）



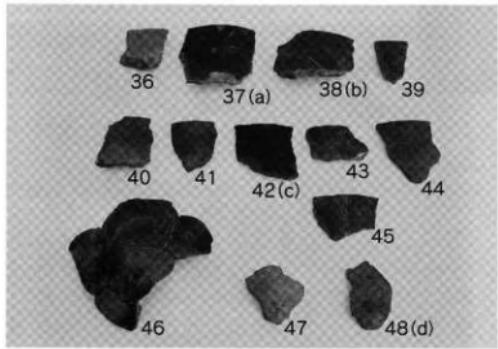
SA10土層（西から）



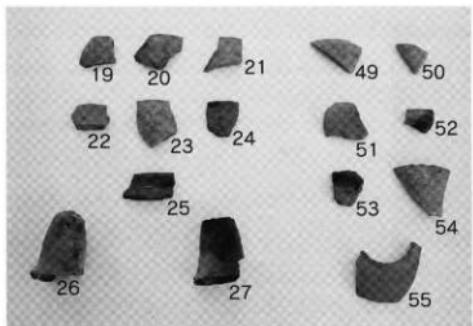
SA1～3遺物



SA4遺物



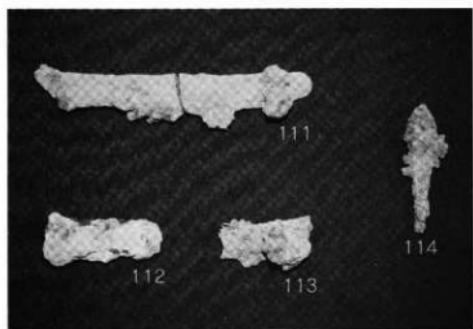
SA9遺物



SA4.9遺物

108

109



鉄器4点



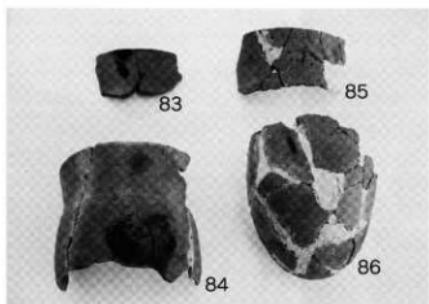
SA3  
(ドングリ)



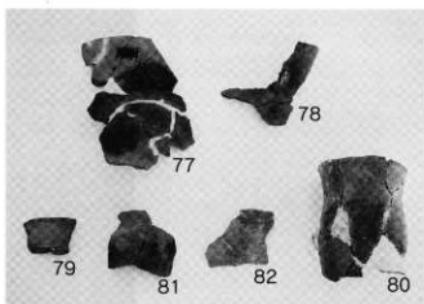
SA10  
(スモモ?)



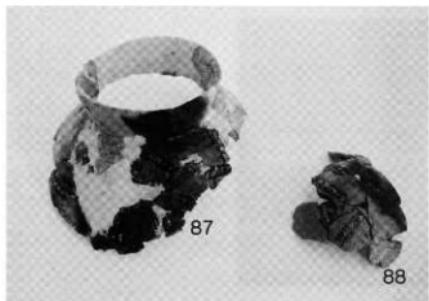
炭化物



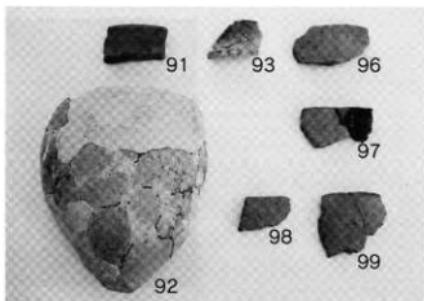
SC5遺物



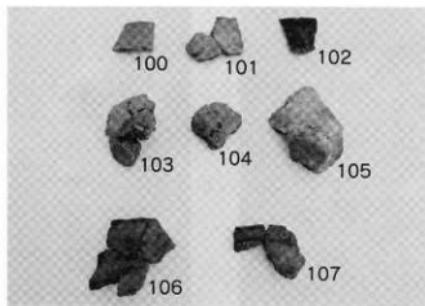
SC5遺物



SC5遺物



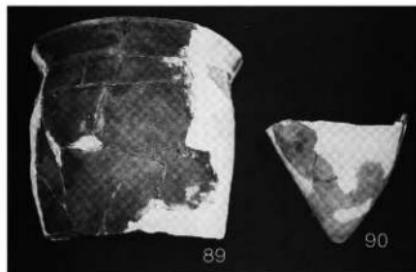
SC6.7遺物



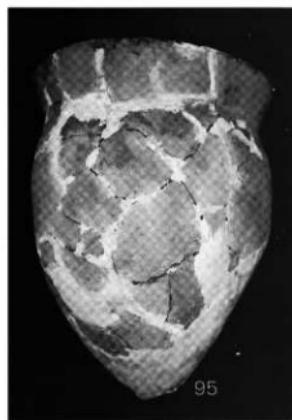
SC12.13遺物



SC5臺形土器



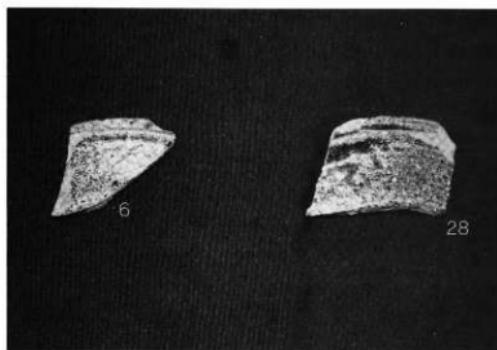
SC6臺形土器



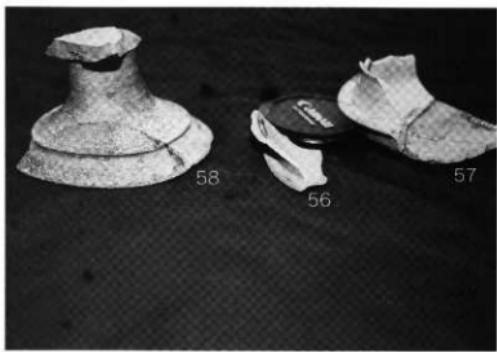
SC7臺形土器



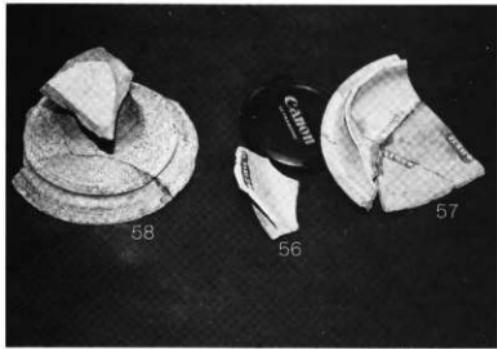
SC7臺形土器



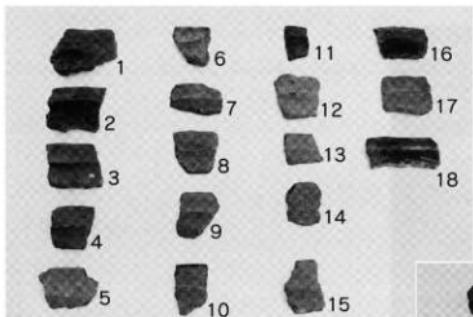
SA2.4須恵器



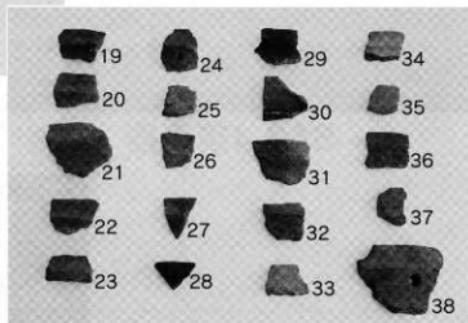
SA9須恵器



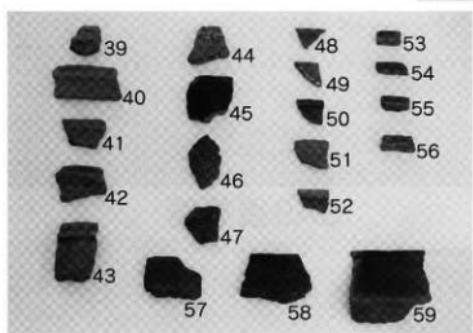
SA9須恵器



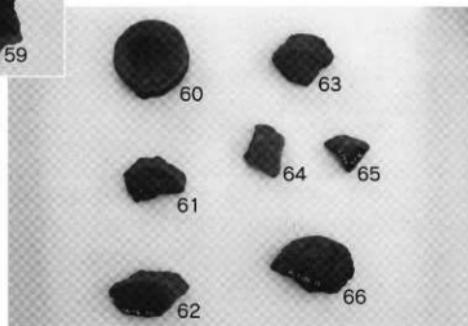
縄文土器



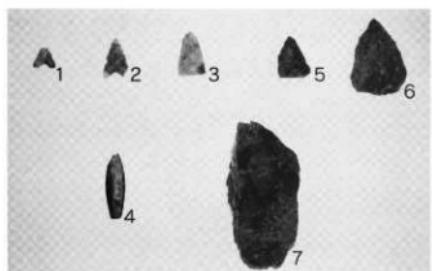
縄文土器



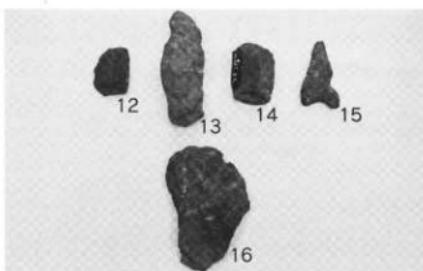
縄文土器



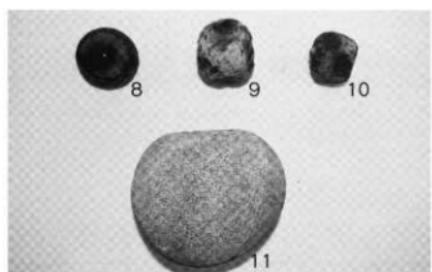
縄文土器



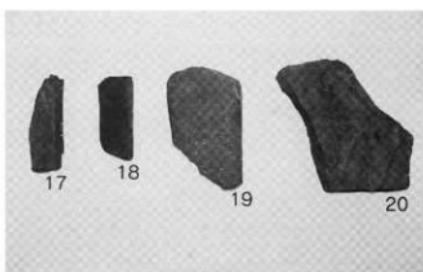
石器



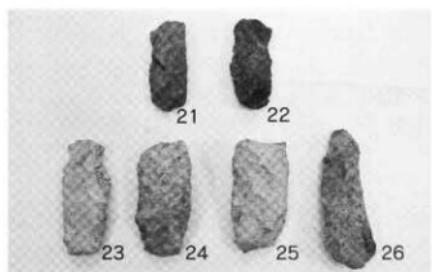
石器



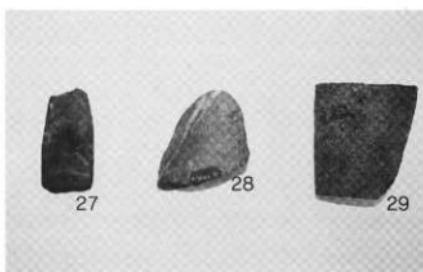
石器



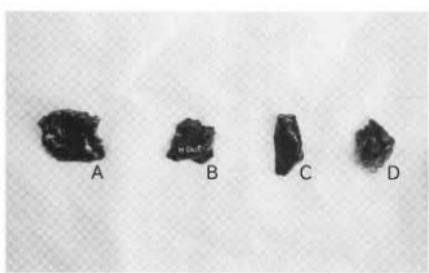
石器



石器



石器



黑耀石

## 報告書抄録

ふりがな	ひらそこいせき			
書名	平底遺跡			
副書名	町営「水と緑の夢空間事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査			
シリーズ名	日之影町教育委員会 埋蔵文化財発掘調査報告書			
シリーズ番号	第1集			
編集者名	柄原嘉明			
編集機関	日之影町民センター			
所在地	〒882-0401 宮崎県西臼杵郡日之影町大字七折9079 番地 みやざきけんにしうすきぐんひのひょうおおじかほななせり			
発行年月日	2003年10月31日			
所収遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
平底遺跡	日之影町 大字七折 字平底	H14.11.25 ～ H15.03.24	5,700 m <sup>2</sup>	町営住宅地建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文時代晩期	竪穴住居跡 側溝形遺構	土器・石器	
	弥生時代後期	竪穴住居跡 側溝形遺構・土坑	土器・石器・管玉 植物の炭化物	「工字突帯文」 土器
	古墳時代中期	竪穴住居跡	土師器・須恵器 鉄器・植物の炭化物	松山産須恵器
	近代以降	溝状遺構	特になし	

---

---

日之影町教育委員会 発掘調査報告書 第1集

## 平底遺跡

町営「水と緑の夢空間事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成15年10月31日

編集・発行 日之影町民センター

〒882-0401 宮崎県西臼杵郡日之影町大字七折9079番地

Tel 0982-87-2309 Fax 0982-87-2772

印 刷 有限会社 三郷中央印刷

〒882-0401 宮崎県西臼杵郡日之影町大字七折12791番地

Tel 0982-87-2946 Fax 0982-87-2956

---